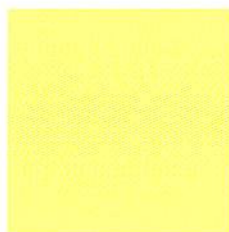
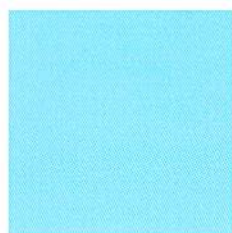
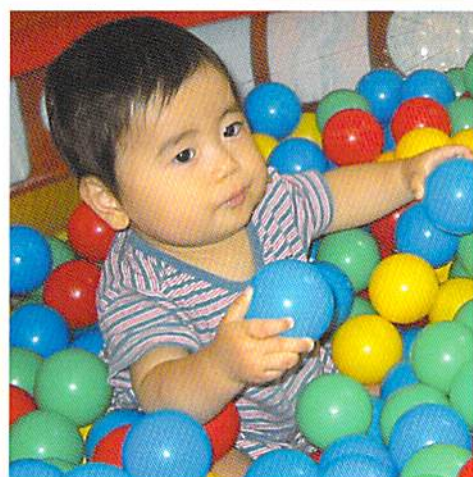


保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2004年度

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所

—第2号—



はしがき

ここに、名古屋キャンパス保育子育て研究所の2年目、2004年度事業のしめくりとなる研究所年報第2号をお届けすることができました。

名古屋キャンパスにおきましては、保育士志望者の増大を反映して、短期大学保育科、保育学部保育学科とも多くの入学生を迎えて、教育活動、研究活動、そして多彩な学生たちの課外活動への支援、大学教員による研究・教育・社会活動などが進められています。このようななかで、保育子育て研究所は、子育て期の主として母親とその乳幼児を対象とする子育て交流会をさかんにし、卒業生をはじめとする若い保育者への研究セミナーを引き続き開催し、そしてより広い層を対象とする公開講座を実施して参りました。その担い手は、本学保育科と保育学部の専任教員をはじめ学外の講師の方々、保育科学生、保育科保育専攻学生、保育学部学生のみなさん、そして本学職員の各層にわたります。

長い歴史を刻む保育科、2005年度に完成年度を迎える保育学部を有する名古屋キャンパスは保育者養成機関としての充実が図られてきました。保育子育て研究所は、キャンパスにおける教育研究組織相互の協力、付属幼稚園との共同、大学と地域社会との連携、そして保育を学ぶ学生たちのさまざまな機会への参加を促進する役割をもって歩み始めています。

保育子育て研究所の果たす役割は以上に尽きるものではありませんが、保育者養成機関として学生の教育自体がきわめて実践的な側面を有し、研究所所員としての位置づけをもつ保育系教員は実習指導を含め実務の多い日々を送っています。大学業務量の増大とともに、その質の向上も重要になっています。研究所の発足と事業の展開が単に業務量の増大ということで評価することはできません。保育研究・教育にかかわる組織と人々の共同と連携を図り促進する研究所の機能は時代の求めるものに応える一つの回答ともなっていると、私どもは考えます。

さて、年報第2号では、研究所事業を紹介する記事としまして、子育て交流会の発展を伝えるもの、学生参加による事業の推進の一つの具体的取り組みである地域子育てマップづくりについての報告、子育てと絵本の関係を講演して下さった山崎翠氏の講演記録、そして上海訪問による中国保育・幼児教育事情を掲載しました。ご一読をお願いします。

今後とも保育子育て研究所の事業を発展させるためには、専門的職員の配置と並んで、保育研究・教育のための統合的な施設の整備が課題になりつつあります。内外の関係者、保育子育て研究事業に関心を寄せる多くの方々のご指導、ご支援も欠かせません。そして、開かれたキャンパスと研究所にしていくためにも、一人でも多くのみなさまの参加と共同が実現しますよう、念願する次第です。

2005年 8月

名古屋キャンパス保育子育て研究所
所長 左口眞朗

目 次

はしがき	2
------	---

I 保育子育て支援と参加活動の広がり

2年目を迎えた子育て交流会【清 葉子 宍戸洋子】	3
名古屋短期大学専攻科・保育専攻学生をリーダーとした 学生参画型・地域子育て支援の試行的取り組み【森本美絵】	16

II 公開講座の記録

絵本の読み聞かせが育む力ーお母さん・保育者へのメッセージー【山崎 翠】	21
-------------------------------------	----

III 訪問調査

JCC幼児教育研究交流上海訪問記【木村和子】	40
------------------------	----

資料

2004年度保育子育て研究所事業報告	46
2004年度保育子育て研究所会計報告その他	49

I

保育子育て支援と参加活動の広がり

2年目を迎えた子育て交流会

清 葉子 穴戸洋子

月4回の「子育て交流会」のスタート

2003年度より始まった子育て交流会も2年目に入りました。昨年度の課題と参加者からの要望をいかして、よりよい子育て交流会を運営していこうと開催回数、開催時間をはじめいくつかの点を改善しスタートすることにしました。

まず、昨年度「もっと回数を増やして欲しい」という要望が多く聞かれたことをふまえて週1回開くことにしました。曜日の設定は、より多くの方に参加していただけるように、毎週同じ曜日に行うのではなく、第1・3火曜日と第2・4水曜日にすることにしました。第1火曜日は穴戸洋子が担当し、他の日は清 葉子が担当することになりました。開催予定日は、前もって2か月分の予定を記したチラシ(資料1 子育て交流会案内)を作り配布すると同時に、名古屋短期大学保育科のHPや「緑子育て情報」に載せてもらったり、付属幼稚園へ園見学に来た親子に配布してもらうなどして宣伝しました。また、時間帯も昨年度より開始時間を30分早め、9時30分から11時までになりました。早めることにより、幼稚園へ子どもを送ったその足で子育て交流会へ参加しやすくなるのではないかと考えました。また、昨年度途中より電話の予約をなくしましたが、今年度も事前の予約は受け付けず、いつでも誰でも気軽に参加できるようにしました。開催回数を増やしたことにより、お母さん方がボランティアでお手伝いをし

たり、保育学部や専攻科の学生の参加も多くなりました。

新年度をむかえ、交流会室の室内配置も変えました。交流会には、0才から入園前の2・3歳の子どもまで参加するので、1歳前の赤ちゃんが安心して床に寝そべってあそぶことができるスペースや仕切りを作り、いつでもお母さんが授乳できるように授乳スペースもつくりました。そして、昨年度同様、手作りのおもちゃを用意したり、専攻科の学生に子どもたちが喜ぶ壁面を工夫して作ってもらい、交流会室に手作りのあたたかさがあふれる環境を整えました。

「子育て交流会」の特色・内容づくり

子育て支援が強く求められている現在、年々、子育て支援事業・子育てサークルの活動が活発になり、保健所・児童館・各種の集会所・保育園・幼稚園など、毎日どこかで親子の集まりが開かれていると言っても過言ではありません。こうした地域の子育て支援事業に学びながら、保育子育て研究所の子育て交流会としてどのような特色を出しながら運営していくのか、保育子育て研究所の会議で相談しながらつくっていきました。

保育者養成大学の子育て支援というメリットをいかした特色として、大学のキャンパスや付属幼稚園という場所を借りることや、将来、保育者を目指す

学生の参加などがあげられます。それと同時に、教員も一緒に子育て交流会に参加する中で保護者の悩みを自然な形で聞いたり、相談にのっていくということをめざしました。また、大学で行うということで、地域の枠を越え、誰でも気軽に一人でも多く参加できる子育て交流会作りをしていくことにしました。このようなことをふまえ、昨年度より引き継いだアウトホームな雰囲気の中で2年目の子育て交流会がスタートしました。

子育て交流会の一日の流れは、9時30分から10時30分まで子どもを自由にあそばせながら、母親どうしの話し合いをもちます。このおしゃべりのなかで、子育ての知恵を交流しあったり、交友を深めます。10時30分から11時までの30分間は、参加者みんなでその日の「お楽しみ」の活動します。「お楽しみ」の活動を期待して参加する子どももいて、朝来ると「今日は何するの?」「たのしみだなあ」という声も聞かれました。

その日の「お楽しみ」の内容は、①季節ならではのもの ②室内だけでなく戸外での活動もとり入れる ③家庭でも気軽にできる身近な素材を使ったおもちゃの製作 ④親子でのふれあいあそび ⑤みんなで共感のもてる絵本やエプロンシアター・パネルシアターを見る などの企画を通して一年間で様々な経験ができるよう考えていきました。(資料2 子育て交流会の経過・参加人数・内容)

①季節ならではのもの

七夕・クリスマス・節分など年中行事をはじめ、みのむしなど季節を感じられるものの製作をしました。覚えた飾りを家で作ったり、持ち帰ったものを部屋に飾ったりして家庭でも行事を楽しむきっかけ作りになったようです。

②室内だけでなく戸外での活動もとり入れる

時には、広い大学のキャンパスを散歩しながらドングリを拾いに行ったり、水あそびをしたり、絵の具

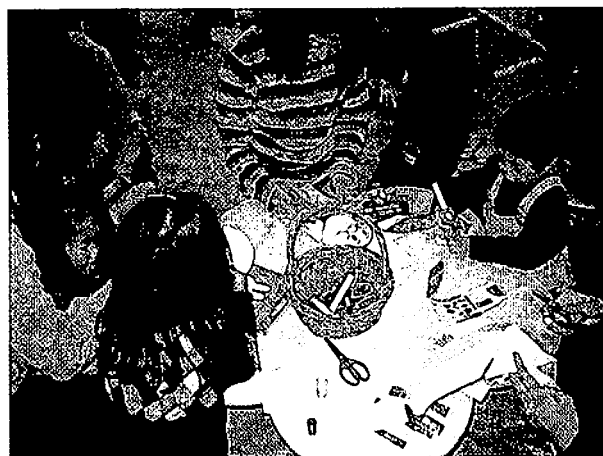
でぬたくりあそびや片栗粉粘土であそんだりして、家庭ではなかなか経験できないダイナミックな遊びも提供していきました。絵の具や片栗粉粘土などは、子育て交流会での経験が初めての子どももいて、汚れることなどを気兼ねすることなく母親も見守りながら一緒に楽しんでいました。



ビニールプールで水あそび

③家庭でも気軽にできる身近な素材を使ったおもちゃの制作

家庭でもすぐにできるように、牛乳パックや画用紙など、どこの家庭にもある身近な素材を使った制作も紹介していきました。中には、子どもだけで作るのは難しいものもあり、母親が手を添えながら親子で協力して作り上げていきました。



牛乳パックを使ったバクバク人形作り

「子育て交流会で作った作品を壁に飾ってあるんですよ」「ここにくるようになって作ることに興味を

もつようになりました」という声も聞かれました。身近な素材をアレンジして作るというヒントを知らせ、親子で作ることを楽しみ、最後には作ったものであそぶ楽しさを味わってもらえることをねらいにしました。

④親子でのふれあいあそび

子どもをひざにのせたり、子どもの顔にふれながらする手遊びや、わらべうたによる伝承的な手遊びを紹介しました。「目の窓あけろ」や「パン屋さん」の手遊びは、子育て交流会の定番の手遊びになりました。紹介した手遊びなどは、家庭でお父さんにも教え家族で楽しんでくれるようになりました。

⑤みんなで共感のもてる絵本やエプロンシアター・パネルシアターを見る

家庭ではなかなかやることはできない、エプロンシアターやパネルシアターなどを見る機会もつくっていきました。あっと驚くしかけに驚いたり、歌をうたいながら楽しんだり、演じ手に釘付けになる子どもの姿が見られました。「母親のほうが楽しんでみる事ができました」という感想もあり親子で共感しながら楽しい時間を過ごすことができました。



エプロンシアター「食いしんぼうのゴリラ」

以上の活動は、子どもに無理強いすることなくお母さんと一緒に一人ひとりの子どものペースにあわせて参加してもらいました。はじめは周りの子どもに圧倒されてお母さんの後ろに隠れていた子ども

や興味をもたなかった子どもも、お母さんと一緒にやることでいろいろな活動に興味をもてるようになっていきました。

また、夏休みや冬休みには、小学生や幼稚園児も参加可能な活動を企画しました。夏休みは、大学の運動場で田中義和先生の指導のもと、ぴかぴかの泥団子作りをしました。付属幼稚園の夏期保育で声をかけ、乳幼児から小学生まで43名の子どもたちが集まりました。年齢の幅はあったものの、お母さんや学生に手伝ってもらいながら楽しんでいました。小学生は、一人で2・3個作る子どももいました。後で、「あまりに上手にできたので玄関に大事に飾ってありますよ」と話してくださるお母さんもいました。冬休みは、付属幼稚園のホールを借りて児童文化研究部による人形劇とぬいぐるみとダンスを楽しみました。事前の問い合わせも多くあり、48名の子どもが集まりました。親子で一緒に共感し楽しむ場と機会が求められていると実感しました。



付属幼稚園のホールを借りて「お楽しみ会」

参加者の増加

今年度は、子育て交流会に154組の親子、延べ子ども741名、大人835名、学生134名の参加がありました。平均して毎回24組前後の親子の参加がありました。豊明市や名古屋市緑区の近隣地域だけではなく、大府市や友だちに誘われて遠方からの参加者もありました。付属幼稚園でチラシをもら

ったり、参加しているお母さん方に誘われて参加される方が多くみえました。交流会では、子どもを安心して遊ばせながら母親どうし話ができるということや、幼稚園・保育園の就園前に集団活動を経験でき、いろいろな友だちとかかわる機会がもてる、というのが参加の魅力なようです。

母親どうしの話題は、幼稚園に通う子どものこと、育児(アレルギー・トイレトレーニング・食事など)についてや病院や公園・レジャー情報など何気ない会話から情報収集をしたり、「なんだ子育ての不安は、自分だけじゃないんだ…」と安心したり、話すことで気分転換になったりストレス解消になっているようでした。

子育て交流会開始後しばらくは、11時を過ぎるとそれぞれ帰って行きましたが、秋を過ぎた頃から、お昼の12時近くまで遊ぶ姿が見られました。お母さんが帰ろうとしても「まだ遊んでいく」と名残惜しうにしている子どもやお母さんどうし話に花を咲かせる姿も見られました。また、帰りに大学の学生食堂で食事をする親子のグループも何組かありました。



お母さんと作ったおもちゃであそんだよ

一年間を通して子育て交流会に参加してくださった方からは、「はじめはただ走り回っていただけだったのが、活動に興味を示すようになり成長を感じられた」とも話していました。子育て交流会を通し

て、親子共に多くのことを吸収し成長するいい機会になっていったようでした。(資料3 子育て交流会参加父母の感想)

お母さんのボランティア

昨年度の終わりに、子育て交流会に参加しているお母さんにボランティアを募ったところ、4名の方の参加の申し出がありました。4月から幼稚園に子どもが入園して時間がとれるという方々でした。お母さん方には、参加者の受付・教材準備・活動の手伝いなどをお願いしました。次第に、一人ではじめて交流会に参加された方と他の参加者をつなぐパイプ役になったり、幼稚園に子どもをいれる際のアドバイスや子育ての先輩としての体験を伝えたりするいい役割を担ってくれました。また、母親だけでなく子育ての経験をいかし子どものあそび相手にもなってくれました。

さらに、絵本や手遊びを紹介したいと数名のお母さんから申し出があり、事前に内容の打ち合わせを行い、お母さん方の発表の場をつくりました。



ボランティアのお母さんが手あそびを紹介

参加されたお母さん方からは、「我が子に絵本を読むときのヒントになった」「とてもいい刺激になりました」という声も聞かれ、教員から提供するばかりではなく、自分の身近な人が手遊びをしたり絵本を読む姿から良い刺激をうけ学ぶことが多かったよう

です。やってくださったお母さん方も「緊張したけれど、楽しんでやれました」「また、機会があったらぜひやってみたいです」と言われ、みんなの前での発表の機会を作っていくことも必要であると感じられました。

学生の参加

保育学部の子育て学生に一年間の大まかな予定を知らせ、参加を募りました。毎回2名から8名程度が参加し、時にはゼミで企画した手遊びやペープサートなどの出し物を持ち寄り、15名も参加する日もありました。専攻科の学生は、壁面を作ったり企画を考えて参加してくれました。

学生には、教材準備や子どもたちとかかわることをお願いしました。はじめはどの学生も、表情が堅く言葉も少ない様子でしたが、30分もすれば子どもやお母さん方と話すきっかけをつかみ、笑顔が見られるようになりました。何回も参加してくれる学生もいて、回を増すごとに自信をつけていったようでした。「うちの子は、大学のお姉さんと遊ぶのが楽しみみたいで…」と安心して子どもを学生に任せてくださるお母さんもみえました。戸惑いながら子どもと接する保育者のたまごを参加されるお母さん方も温かく見守ってくれました。



学生と一緒に片栗粉粘土あそび

ゼミでの企画も、学生ははじめて子どもたちの前

でやるということもあり、かなり緊張していました。子育て交流会終了後、導入の仕方や言葉がけなど気づいた事をアドバイスしていきました。

学生の感想からも、「いい経験になった」という声が多く、自分なりに親子とかかわる中でたくさんのことを学びとっていたようです。(資料4 子育て交流会参加学生の感想)

まとめと今後の課題

今年度の子育て交流会は、昨年度の親の要望を取り入れ交流会の回数を昨年の月1回から4回に増やし、時間も昨年の10時開始を30分早め、9時半から11時までと長くしました。2年目ということもあり、地域に根づいてきたためでしょうか、雨の日も幼い乳幼児をつれて10組から、多いときには48組ものたくさんの親子の参加がありました。年間31回実施し、平均すると毎回24組の親子の参加がありました。子育て交流会室の広さからしたら、超満員、身動きできない状態でしたが、これだけの切実な強い要求があるのです。もっともっと親子がゆったり過ごすことができる広い場所の確保が参加者一同の切実な願いです。

また、この子育て交流会に参加する子どもたちは、発達段階から丁度、基本的生活習慣が身につく時期です。排泄の自立を促すトイレトレーニングの大切なときに、トイレが近くなく図書館まで走らなければならないことも、なんとしても早急に解決したい問題です。

今年度、付属幼稚園のホールを冬休みに借りて「お楽しみ会」をしました。子どもたちも親たちもゆったりとんびり過ごすことができました。就園前の子どもたちにとっては、幼稚園に慣れるいい経験になります。今後、こうした機会が増えるよう園と話し合っていきたいと思っています。

今年度の子育て交流会が、狭くて不便で窮屈な

思いをしても、これだけの参加があったのは、緑あふれるキャンパスを活かし、散歩やどんぐり拾い、泥団子づくりをしたり、戸外で水あそび、片栗粉粘土あそび、絵の具あそびをしたり、毎回、手遊びや人形劇、紙芝居、製作等の「お楽しみ」があったことが魅力だったようです。来年度も、こうした保育内容の創意工夫をしていきたいと思っています。また、専攻科の学生が手作りのおもちゃや子どもたちの喜ぶかわいい壁面製作をし、あたたかい環境づくりに取り組んでくれたことも大きな魅力になっています。

今年度、交流会の回数を増やすに当たって、お母さんのボランティアを募ったところ、4名の協力が得られました。いずれも昨年、この交流会に参加されていた方々ですが、戸惑いながらも、他の子の世話や会の手伝いを通して頼もしいアシスタントに成長されていきました。

この交流会のねらいは、就園前の乳幼児を持つ父母の子育て支援として、子どもたちを遊ばせながら親どうしの交流をもつことです。このねらいはほぼ達成され、どのお母さんも気の合う友達を見つけ、おしゃべりのなかで不安な子育ての悩みが解消されていったようです。かつての井戸端会議の役目をこの交流会が担っています。さらに、ここで出会ったお母さんたちによる自主交流会も3回実施されました。子どもを遊ばせながら、お母さんどうしの交流を深める大切な場にもなっています。こうしたお母さん方による自主交流会やボランティアのお母さんが、これからも増えていくことを望んでいます。

今年度、回数を増やすことによって、学生の参加も多くなりました。交流会に直接参加できなくても、キャンパスを散歩する親子に間接的に触れ合うことができたり、ゼミ単位で交流会室を利用することも多くなってきました。保育者を養成する保育科、保育学部のあるこのキャンパスで実施する子育て支

援として、地域の子どもたち、親たちに貢献するとともに、学生もこの子育て交流会室をおおいに活用し、保育者として、将来の親として成長する場になることを願っています。そして、こうした大切な役割を担っている保育子育て研究所の活動が、ますます充実し発展していくよう、専任の職員の配置が今後に残された大きな課題です。



資料1 子育て交流会案内



子育て交流会 8・9がつの予定



8月 夏休みのパパも一緒にご参加ください!

★8月 3日 火曜日 水あそび

★8月25日 水曜日 水あそび・泥だんご教室(先生の予定がついたら…)

おもちゃやぬれてもいい服を持ってきてね。水着など)

おもちゃには必ずなまえを書いてきてね!

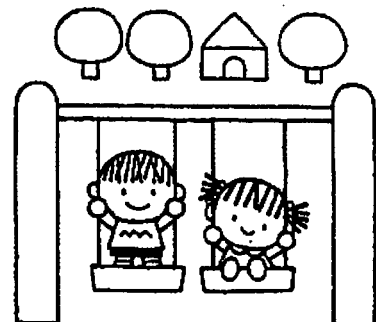
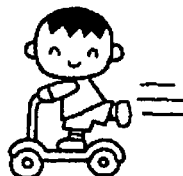
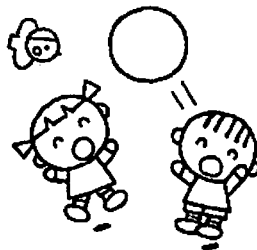
9月

★9月 7日 火曜日

★9月15日 水曜日

★9月21日 火曜日 さんぽ

★9月29日 水曜日



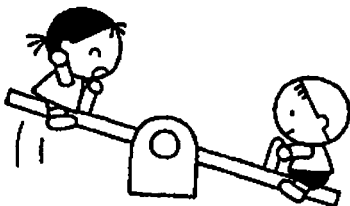
9時30分から11時頃までやっています。好きな時間にお越しください。

自由に遊んでいただき、10時30分頃からお楽しみがあります。

乳児のお子さんでも遊べるスペースを作りました。是非ご参加ください!



電話 0562-97-1306(内線330)子育て交流室



資料2 子育て交流会の経過・参加人数・内容

	4月17日(土)	2004年度子育て交流会の準備会	子ども25名	大人19名	
	4月27日(火)	付属幼稚園の保護者に「子育て交流会」のチラシ配布。			
※	5月11日(火)	第1回 子育て交流会			
		子ども 35名	大人 38名	学生 6名	
		自己紹介・手遊び			
		布絵本「いないいないばあ」、ペープサート「コブタヌキツネコ」			
※	6月 1日(火)	第2回 子育て交流会			
		子ども 39名	大人 42名	学生 7名	
		手遊び「目の窓開けろ」、絵本『てんてんてん』、歯磨き人形			
※	6月 9日(水)	第3回 子育て交流会			
		子ども 21名	大人 23名	学生 5名	
		パネルシアター「なんだろう」「ピコピコテレパ」、			
		親子触れ合い遊び			
※	6月15日(火)	第4回 子育て交流会			
		子ども 26名	大人 30名	学生 5名	
		描画「お父さんの顔」			
※	6月23日(水)	第5回 子育て交流会			
		子ども 42名	大人 45名	学生 7名	
		絵の具あそび			
※	7月 6日(火)	第6回 子育て交流会			
		子ども 34名	大人 39名	学生 9名	
		紙芝居「たなばた」、七夕の笹飾り制作			
※	7月14日(水)	第7回 子育て交流会			
		子ども 32名	大人 36名	学生 3名	
		大型絵本『はらぺこあおむし』			
※	7月20日(火)	第8回 子育て交流会			
		子ども 31名	大人 35名	学生 3名	
		水あそび			
※	8月 3日(火)	第9回 子育て交流会			
		子ども 16名	大人 18名	学生 4名	
		水あそび、片栗粉粘土あそび			
※	8月25日(水)	第10回 子育て交流会			
		子ども 43名	大人 44名	学生 2名	
		泥だんごづくり			
※	9月 7日(火)	第11回 子育て交流会			
		子ども 18名	大人 23名	学生 6名	
		手遊び「めがね」、大型絵本『ぞうくんのさんぽ』			
※	9月15日(水)	第12回 子育て交流会			
		子ども 26名	大人 30名	学生 3名	
		片栗粉粘土あそび			
※	9月21日(火)	第13回 子育て交流会			
		子ども 20名	大人 24名	学生 試験	

- 手遊び「だっこしてぎゅっ」「パン屋さん」
エプロンシアター「大きなかぶ」
- ※ 9月29日(水) 第14回 子育て交流会 天気：台風
子ども 9名 大人 11名 学生 2名
子どもを遊ばせながら、母親どうし育児について話し合う
- ※ 10月5日(火) 第15回 子育て交流会 天気：雨
子ども 11名 大人 14名 学生 8名
手遊び「目の窓開けろ」「パンパンパン」親子遊び「パンやさん」
ペープサート「コブタタヌキキツネネコ」
紙芝居「アヒルのピイピイ」
- ※ 10月6日(水) 自主交流会 天気：晴
子ども 7名 大人 7名
子どもを遊ばせながら、母親どうし育児について話し合う
- ※ 10月13日(水) 第16回 子育て交流会 天気：晴
子ども 21名 大人 24名 学生 2名
どんぐり拾い
- ※ 10月19日(火) 第17回 子育て交流会 天気：雨
子ども 15名 大人 16名 学生 8名
パネルシアター「パンパンサンド」
ふれあい遊び「おかあさんのおひざ」
- ※ 10月27日(水) 第18回 子育て交流会 天気：曇 強風
子ども 13名 大人 16名 学生 2名
制作「ヘリコプター」
- ※ 11月2日(火) 第19回 子育て交流会 天気：晴
子ども 19名 大人 23名 学生 4名
絵本『ごあいさつあそび』 手遊び「野ねずみ」
ペープサート「はく、だーれ」
- ※ 11月10日(水) 第20回 子育て交流会 天気：晴
子ども 15名 大人 18名 学生 3名
制作「みのむし」のちぎり紙あそび
- ※ 11月16日(火) 第21回 子育て交流会 天気：晴
子ども 22名 大人 26名 学生 10名
絵本『ばばんのぱん』 手遊び「パン屋さんにお買い物」
手遊び「糸巻き」「お父さんとお母さんが」
- ※ 11月24日(水) 第22回 子育て交流会 天気：晴
子ども 12名 大人 15名 学生 15名
パネルシアター「カレーライス」
紙芝居「アンパンマンとカレーパンマン」
手遊び「カレーライス」「トントントンアンパンマン」
- ※ 12月1日(水) 自主交流会 天気：晴
子ども 12名 大人 10名
子どもを遊ばせながら、母親どうし育児について話し合う
- ※ 12月7日(火) 第23回 子育て交流会 天気：曇り
子ども 19名 大人 20名

- 手遊び「パン屋さん」、組み木「てぶくろ」
子育ての悩みを出し合う
- ※ 12月15日(水) 第24回 子育て交流会 天気：晴
子ども 23名 大人 25名
制作「クリスマスツリー」
紙芝居「ごきげんのわるいサンタさん」
- ※ 12月21日(火) 第25回 子育て交流会 天気：晴
子ども 48名 大人 52名 学生 4名
付属幼稚園の遊戯室でお楽しみ会をする。
児童文化研究会の学生による人形劇「なかよし」を鑑賞
学生の着ぐるみ人形と一緒にフォークダンスをする。
- ※ 1月12日(水) 第26回 子育て交流会 天気：晴
子ども 18名 大人 20名 学生 3名
制作 牛乳パックを使った「パクパク人形」づくり
- ※ 1月18日(火) 第27回 子育て交流会 天気：晴
子ども 25名 大人 27名 学生 8名
手遊び 「たまご たまご」
読み聞かせ『たまごのあかちゃん』『たまごにいちゃん』
制作 しかけおもちゃ作り「たまご」
- ※ 1月26日(水) 第28回 子育て交流会 天気：晴
子ども 33名 大人 37名 学生 2名
制作「オニのお面」「マス」
絵本『てぶくろ てぶくろ』
豊明市こどもNPOピンボンハウスの母親10名見学参加
- ※ 2月 1日(火) 第29回 子育て交流会 天気：晴
子ども 19名 大人 22名
ペープサート「カニのはさみ」
エプロンシアター「くいしんぼうのゴリラ」
- ※ 2月15日(火) 第30回 子育て交流会 天気：晴
子ども 17名 大人 19名 学生 1名
読み聞かせ 大型絵本『びょーん』 わらべうたあそび「おせんべ」
おはなしタペストリー「3びきのこぶた」
- ※ 2月16日(水) 自主交流会 天気：晴
子ども 10名 大人 10名
子どもを遊ばせながら、母親どうし育児について話し合う
- ※ 3月 1日(火) 第31回 子育て交流会 天気：晴
子ども 19名 大人 23名 学生 2名
ペープサート「コブタヌキツネコ」 マジック「ハンカチ・ひも」
制作「動物のペンダント」

2004年度 子育て交流会

・交流会 31回	・子ども 741名	・大人 835名
	・学生 134名	
・自主交流会 3回	・子ども 29名	・大人 27名

資料3 子育て交流会参加父母の感想

- ・ 子育ての悩みも、ここに来れば相談にのってくれる人がいるので、気持ちが楽になりました。
- ・ ここで覚えた手遊びや、折り紙を家でも大喜びでやっています。
- ・ 学生さんの手作りのおもちゃやかわいい壁面に、子どもだけでなく親の私まで楽しんでいます。
- ・ とても安全で楽しく遊べる遊具やおもちゃが気に入りました。すばらしいですね。
- ・ 最近、子どもがダダをこね、あばれることが多く、親としておおらかに接することができず、イライラしていましたが、ここへきてホッとしています。
- ・ 子どもも安心して遊べ、親どうしも気兼ねなくおしゃべりができてとっても楽しいです。
- ・ アットホームでとても親切な先生方になんでも相談できて子育ての悩みが消え、気持ちが楽になりました。
- ・ ボールプールが好きで子どもが楽しんでいましたが、それに付き合ってくれる学生のお姉さんが大好きみたいです。
- ・ 参加者が多く、狭いなあと感じました。もっと、のびのび遊べる広い場所がほしいですね。
- ・ 工作は、楽しいアイデアがいっぱいあって、家で出来そうなものばかりなので参考になりました。
- ・ 絵本や紙芝居、ペープサートや人形劇など「お楽しみ」があって、親子共々、いつもわくわく期待しています。
- ・ いままで、自分の子どもが落ち着きがないと心配していましたが、交流会でたくさんの子どもたちに接し、自分の子どもがそれほど変だと思わなくなり、ストレスが消えました。
- ・ いつも子どもを叱ってばかりいましたが、ここにきて、先生やほかのお母さんたちの子どもへの接し方を見て反省しました。
- ・ 子どもが手作りのすべり台がとても気に入って、のびのび遊んでいる姿をみることで参加してよかったです。
- ・ 毎週、子どもが遊べる場ができ、私もほかのお母さん方とお話ができ喜んでいきます。
- ・ 思うようにならないと、どこでもひっくりかえって泣いていましたが、子どもどうしの遊びから、子どもなりにすこし我慢できるようになってきたように感じます。
- ・ 友だちと仲良く遊ぶ姿が、来春からの園でのイメージとしてふくらみ安心できました。
- ・ 引越ししてきて、だれも知らない土地だったので、この交流会が心の支えで毎回楽しみに参加させてもらっています。
- ・ 引っ込み思案で、恥ずかしがりやで、友だちのなかになかなか入れませんでしたが、回を重ねるうちに、友だちとあそべるようになりほっとしています。
- ・ 近所に同年齢の子どものいないので、ここで子どもも、親も友だちができました。
- ・ この交流会ののんびりしたペースが気に入っています。いつでも、だれでも気楽に参加できる、この子育て交流会のアットホームな雰囲気をいつまでも大事にしてほしいです。

資料4 子育て交流会参加学生の感想

- ・ 子どもがはじめ、母親のところばかりにいて、自分はどのようにいいかわからなくとまどった。しかし、徐々にお互いに慣れてきて、子どもも近づいてきてくれたが、どう言葉をかけ、どう接したらいいかとまどった。
- ・ 1・2歳児の子も、発達個人差があるんだなあということを感じました。ここにいる子は、未就園児ばかりだったので、3歳の子でも大きなあと感じた。
- ・ 子どもと接する機会があまり多く、実際に子どもたちと関わることでよかったです。
- ・ 今日、初めて会った子どもたちで、知らないお姉さんとはじめはうつらなかつたと思います。でも、最後には、笑顔でさよならできました。積極的に、また、こういう機会をもって交流していけたらと思いました。今日は、ほんとうに楽しかった。
- ・ 子どもたちと過ごす時間があつという間に過ぎていって、本当に楽しんで一緒に遊ぶことができました。子どもだけでなく、お母さん方にも、いろいろと話を聞かせてもらうことができたのもよかったです。
- ・ お母さんから、2ヶ月の赤ちゃんを「だっこする?」と、聞いてくれておどろいた。初めて抱きました。はじめ、こわかったけど、すごくかわいかった。
- ・ 今日は2回目の参加で、前回一緒に遊んだお友だちもいて、会うことができてうれしかったです。一緒に過ごす時間を継続して共有できることは子どもと親さんにとっても(私にとっても)とてもよいことだと感じました。子どもと関わるだけでなく、今日は、お母さんとの交流を深めようと話しかけることができました。それぞれのお母さんたちが子どもに対して感じていたり、思っていることが、少しですが知ることができて勉強になりました。
- ・ 様々な年齢の子がいて、自由あそびを生き生きと遊んでいたのが印象的でした。お母さんがそばにいてくれるという安心感から、のびのびと遊んでいる子、お母さんのそばに、べったりとして離れられない子など、いろんな子がいました。やはり、お母さんが、どれだけ大きい存在なのかわかりました。保育園、幼稚園ではみられない子どもの顔がみれた気がします。
- ・ 子どもたちは、滑り台やボールなど、好きなあそびをしたり、お母さんや友だちと触れあったりして、楽しそうだなと思いました。
- ・ 子育て交流会室の雰囲気のがんびりとしたとてもあたたかいものだったので、私自身も入った瞬間、顔が笑顔になってしまいました。お母さんとお子さんが触れ合うことは、家では忙しくてなかなか難しいという人もいると思うので、こういう場がとてもいい機会になっているんだということを感じました。
- ・ 母親どうしの交流や、子どもどうしの交流も、ほんの少しの時間でも、何度も子育て交流会に参加することでできると感じました。
- ・ 保育園実習のとき、その保育園に併設されている子育て支援センターを見せてもらったことがありましたが、実際に子育て交流会というものが、どんなことをしているかを体験を通して知ることができてよかったです。母親どうしの交流、子どもどうしの交流、また、他の子どもと親との交流があり、共に育っていくことの大切さを改めて感じました。

- ・ 今日、たくさんのお母さん方と関わらせていただいて、お母さんのなかにも、なかなか中に入れない方、あそびの中心になって積極的に働きかけている方など、様々な方がいることに気づいた。保育者になったとき、お母さんが中に入れるように声をかけたり、いろいろな働きかけができるようにしていきたい。
- ・ この交流会は、同じぐらいの年齢の子どもどうしが遊べたり、お母さん方の悩みを聞いたり、すごい役割を果たしているのだと思った。
- ・ 先生の子どもへの声かけ、本の読み方、ペープサートの演じ方など、とても参考になりました。
- ・ 手遊び、絵本の読み聞かせ、制作など短い時間に様々な体験ができ、充実した時間が過ごせました。
- ・ 1・2歳の子でもペープサートを楽しむことができることを学びました。先生の導入のしかた、演じ方など、これからの実習に生かしていきたいと思いました。
- ・ 子どもも幅広い年齢の子がいて、手あそびやリズムあそびをやるときに、様々な年齢の子が行えるように工夫しなければならないと思いました。でも、歌がはじまると、子どもが一斉にこちらに関心を向けることに驚きました。音ってすごいなと感じました。
- ・ 新聞紙を使って遊びました。散らかしてしまいましたけれど、破るだけでなく、にぎったり、投げたりといろいろな発見がありました。学生とお母さんと子どもが一体となってできたように思い、大成功でした。
- ・ はじめは、うまくいかと心配だったけれど、楽しんでもらえたみたいで、よかった。手あそびは、まだ難しい部分があったりして、もう少し、考えて選べばよかったとも思う。うまく声かけができなかったけれど、お母さんが子どもの手をとってやってくれたので助かった。これからも、手あそびのレパートリーを増やしていきたいです。
- ・ 初めて子どもの前で軍手人形を使って演じました。すごく興味をもってくれる子がいてうれしかった。これからも、子どもたちにとって魅力的なもの、目を引くもの、興味のあるものは何か、もっと調べていこうと思いました。
- ・ 以前参加したときより、子どもたちが大きくなっていて、子どもの成長(特に乳児)は早いなあと改めて感じました。
- ・ 先生やお母さんの絵本の読み聞かせは、とても勉強になりました。
- ・ 先生の、お母さんがたと接する接し方が自然で、保育現場に出たときの参考になりました。
- ・ お母さんどうしが仲良くしゃべっていて楽しそうだった。親にとってこういう場所は、本当に必要なんだと改めて思いました。



名古屋短期大学専攻科・保育専攻学生をリーダーとした 学生参画型・地域子育て支援の試行的取り組み

森本美絵

平成16年度に「学生参画型・地域子育て支援」の試行的取り組み段階として、教員・学生が共同して地域に根ざした子育て支援の取り組みを行った。その成果として、子育て支援マップ第1号(以下「どろんこマップ第1号」と記す)を作成し地域に配布・報告した。この「どろんこマップ第1号」は本学の位置する愛知県豊明市の約4分の1の地域を対象としている。学生らはグループを組んで、夏休みを利用して地域に出かけ、公園や神社など、親子で自然体験や遊びのできる場所を探し、自らが遊びの実体験をした。そして、それら資料を大学に持ちかえり、その場所・遊び方などをイラスト・写真入りでまとめ、さらに自然に関わる絵本を選別し特徴を要約した。

本稿では、これら試行的取り組み実践の意義及び経過、そして平成17年度の取り組み予定について報告する。

1. 「どろんこマップ第1号」作成の意義

本学が立地する愛知県豊明市は名古屋市に隣接しており、近年ベッドタウンとして、サラリーマン世帯の住宅やマンションが急増している。また、通勤族も多く、乳幼児を持つ家族の居住が増えている地域でもある。それ故に、本学の保育子育て研究所が地域貢献活動の一環として平成14年度より実施している「子育て交流会」には、当初の予想をはるかに超えて、非常に多くの親子が参加するという状況がある。つまり、地域の子育て支援に対するニーズは非常に高いといえる。そして、本学保育科学生は、卒業後の就職先としてほぼ100%が保育者として保育所・幼稚園で勤務することを希望している。

平成15年11月の児童福祉法の一部改正により、「保育士とは、登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」と規定された。保育士は、保育に関する指導・助言をする専門家として、地域の特性を把握し地域の社会資源と連携し、適当な子育て

支援を展開する力量を求められる。ゆえに、このような子育て支援ニーズの高い地域において、本学保育科及び専攻科の学生達が、学生時代に子育て支援活動を体験しておくことは、将来保育者として就職した際には、保護者の対応やその地域における子育て支援活動をすすめる上で極めて有効であると考えられる。

2. 「どろんこマップ第1号」作成の過程

1) メンバー構成

活動メンバーは、名古屋短期大学専攻科・保育専攻1年生の学生3人と「子育て支援活動」の趣旨に賛同した保育科1年生9人の合計12人であった。リーダーは、3人の専攻科学生とし、助言者としての役割を保育科専任教員4名が担当した。そして、この活動団体を「めいたんけん隊(名短探検隊)」と命名した。

2) 活動の目的と方法

現在の子育てをしている親とその子どもが、ともに体験し損なう自然との関わりを重視した遊びの場と楽しみ方等を提供することを目的として「豊明

市子育て支援・どろんこマップー子どもたちに自然との関わりの中で目の輝きをー」を作成することを目的とした。そして、活動メンバーが保育を専門に学ぶ学生であり、近い将来保育者になる予定であることや、子育て予備軍でもあるという活動主体の特性から、次の2点を視点として取り組むことにした。つまり、この冊子の内容・構成は、①子どもの健やかな成長を支援する、②親の子どもと向き合う力の涵養を支援する、であった。

活動の方法としては、「自然、子どもの目線、親子で楽しむ」をキーワードとして以下の4つのことに取り組んだ。

- ①幼稚園・保育園を訪問し、自然との関わりを目的とした取り組みについての聞き取り調査をする。
- ②神社・公園に出かけてキーワードに沿った探索をし、スケッチ・写真撮影などをする。
- ③自然物を利用したオモチャ作り及び遊び方を調べ実践し、イラスト入りでまとめる。
- ④自然に関わる絵本を読み合い、吟味し選別する。

なお、活動するにあたり、地域社会で現在子育て支援をしている団体との連携を重視し、豊明市隣接地区において、保護者向けの子育てに便利な情報冊子を作製していた活動団体の代表者に依頼し、冊子を作成するに至った動機及び作成手順、その後の活動状況について語ってもらった。また、地域の子育て団体への協力要請を目的として、本学教員・専攻科学生と団体代表者らとの合同会議を開催し、協力要請の承諾を得た。

毎月の主な活動は、以下のようであった。

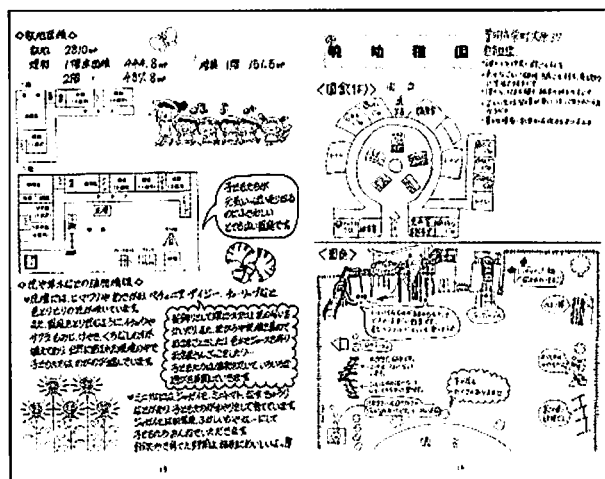
平成16年 4月	専攻科1年生と教員とで、子育て支援の意義等について話し合う。
5月	「子育てを支援するという目的で冊子を作る」という趣旨に賛同した保育科1年生との初めての顔あわせをした。今後は、学生間で自由に話し合いの場を設定すること、月1回は、教員と学生の合同会議を開催することを確認した。
6月	冊子の項目を決定した。地域の子育て応援団の代表者に依頼し、作成手順などの話を全員で聞いた。地域の子育て支援団体の代表者ら数名と会合し「どろんこマップ」作成の趣旨を伝え協力を要請した。
7月・8月	夏休みを利用して、グループで幼稚園、保育園、公園、神社などに出向き、資料等を作成した。
9月	作成した資料を各学生が発表し講評した。資料のレイアウトを決定し清書をした。
10月	“親子のふれあい”をキーワードとした簡単に作れる手作りおもちゃ及びその作り方等を紹介しあった。
11月	草花遊びに関わる項目を作成するために、メンバーで遊び方などを紹介しあった。
12月	自然に関わる絵本の選別を目的として、120冊の絵本を紹介しあった。
1月	表紙、目次、編集後記などを分担して執筆した。
2月	原稿の最終確認をした。
3月	印刷屋と編集確認をした。「どろんこマップ」が完成した。
平成17年 4月	地域へ配布し報告した。

3) 内容の紹介

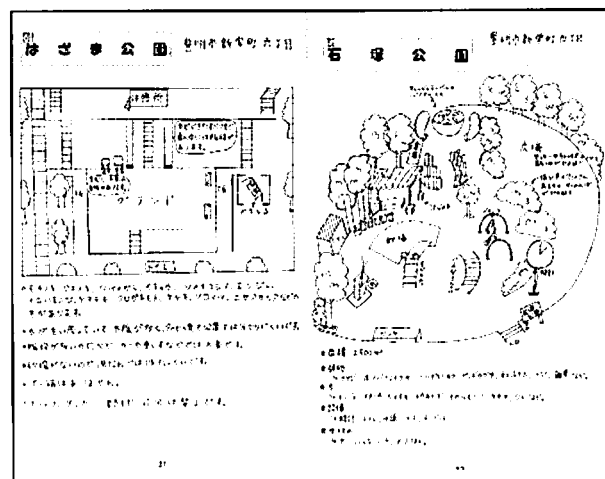
内容は、目次と各ページの写真から紹介する。冊子の中の文章は、すべて手書きである。これは、“手作りのあたたかさ”をこの冊子を手に取る親子に伝えたいという意向を強く学生が持っており、それらを伝える一つの方法として手書きとした。

〈目次〉

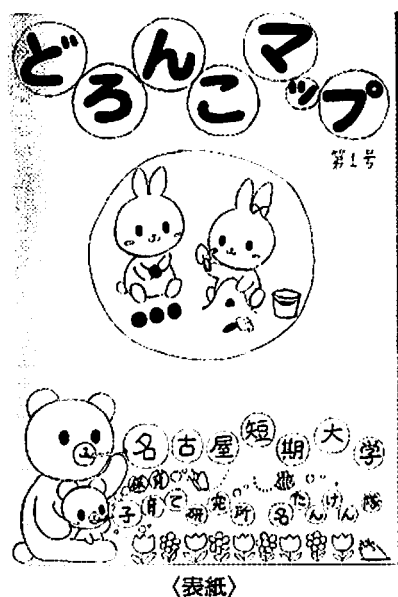
- | | |
|------------------|---------|
| 1 はじめに | P.2 |
| 2 豊明市の地図(対象地域) | P.3~4 |
| 3 幼稚園・保育園 | P.6~16 |
| 4 公園・神社 | P.18~31 |
| 5 ピカピカ泥だんごの作り方 | P.32~35 |
| 6 草花あそび | P.36~46 |
| 7 手作りおもちゃ | P.48~60 |
| 8 子育てインタビュー | P.62~65 |
| 9 おすすめ絵本 | P.66~74 |
| 10 どんどこMapができるまで | P.75 |
| 11 メンバー紹介 | P.76~77 |
| 12 おわりに | P.78 |



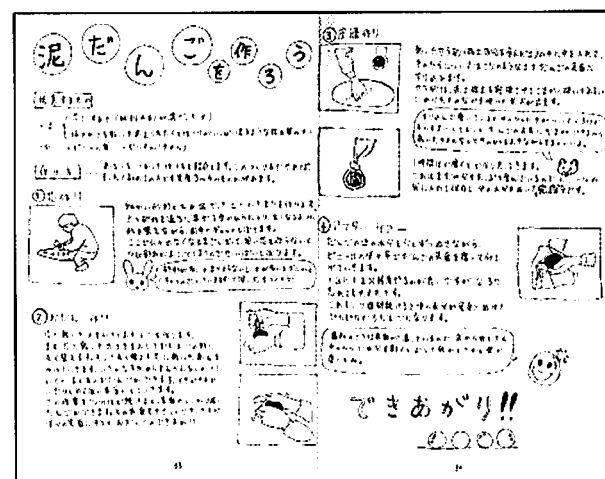
〈幼稚園・保育園 pp.13-14〉



〈公園・神社 pp.21-22〉



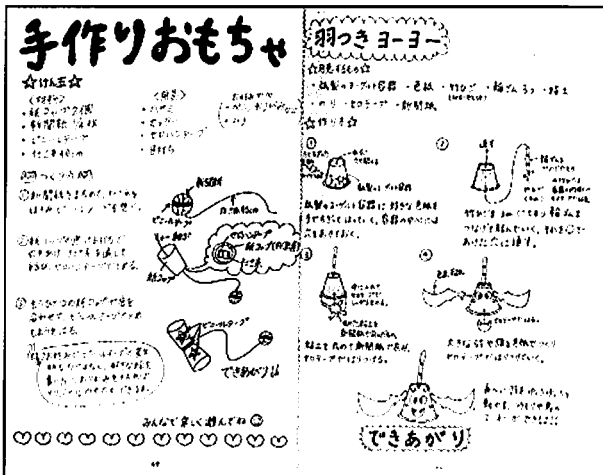
〈表紙〉



〈泥だんご pp.33-34〉



〈草花あそび pp.45-46〉



〈手作りおもちゃ pp.49-50〉



〈おすすめ絵本 pp.67-68〉

3. 課題と平成17年度の取り組み

1) 課題

学生主体による本取り組みが、地域においての子育て支援の一助となりえたか否かの評価は、重要な課題である。しかし、現段階においての評価は、(子育て支援マップを作製し地域に配布・報告したにすぎないことから、)時期尚早であるといえる。今後さらに、本取り組みを継続し体制及び内容を充実していく過程において実施することとする。また、その評価については、意味のある評価尺度を作成する必要がある、早急な検討課題としたい。

そこで、本誌では、保育専門職(保育士・幼稚園教諭)養成において、本活動が教育的な波及効果として期待できることをあげ、課題を検討する。

教育的に期待できることは、①学生が現在大学で学んでいることを、実際に子どもやその保護者に対して提供することで、学びの意欲をいっそう高める事ができる、②定式化した子育て支援ではなく、その地域の住民ニーズに基づいた支援の組み立ての必要性を実体験することができる、③体験的・自主的に進めることで、社会が求める課題に応えられる子育て支援マインドをもった保育者を養成することができる、④学年を超えた学びを共有できる、⑤地域の子育て支援機関や民間団体との連携について学ぶことができる、などである。

そのためには、推進組織としての体制・内容の充実を図る、住民ニーズの調査・分析をする、学生の活動に対するフィードバックの徹底をはかる、地域の機関・施設等との連携を強化する、などの課題がある。

2) 平成17年度の取り組み予定

先の課題等を踏まえ、次のような実施計画をたてた。

①活動主体として、専攻科1年生と保育科1年生(30名)を子育て支援委員と命名し、専攻科学生

をリーダーとする「子育て支援委員会」を結成する。

②豊明市全域のどろんこマップを作成する。

③どろんこマップの実践的活用の紹介として子育て支援機関及び民間団体などに出向き実演し、アンケートを実施する。

④子育てに関わるインタビューを拡大する。

⑤創作絵本、創作おもちゃ(自然遊びから)を作製し紹介する、などである。

今年度においても、平成16年度の取り組みをベースとして、主体的な学生の活動を尊重し、地域に根ざした学生による活動の実践を支援したいと考えている。

Ⅱ

公開講座の記録

絵本の読み聞かせが育む力ーお母さん・保育者へのメッセージー

山崎 翠

皆さんおはようございます。ご紹介を受けました山崎でございます。

今日は、レジメが右と左に分かれておりますけれども、二つ大きく分けて、1部、2部にしたいというふうに考えております。皆様のほうから見ていただいて、演題が書いてあります「1 今、子どもたちに」というところと、「2 読み聞かせが育む力」、ここを1部にいたします。「3 いのちにふるえる感性を」の部分を2部にしたいと考えました。だいたい時間の配分を1部、2部を半々ぐらいに考えています。

2部に関連しますが、2月16日に、京都議定書が発効いたしました。環境問題を頭に置きまして、環境保育ーこの言葉はまだ日本ではこれからということでございますがーについてふれたいと思います。たまたま10年前から私は環境問題を幼い子どもたちと一緒に、という気持ちから、ドイツのフライブルクまで行ってきまして、幼稚園・保育園ではどのように、幼い子どもと環境保育をなさっているのか、本当に短い時間でしたので、十分獲得できませんでしたが、学んでまいりました。そのことも含めて、1部2部では環境と絵本というところで、これからの皆様が保育園でお仕事をなさる、幼稚園でお仕事をなさる、その先生方に何かのお役に立てたらうれしいなという、そんな気持ちです。さらに生活者としてお子さんを育てていらっしゃる地域の皆

様にとっても、何かお役に立てば、と思います。

さて、私は1部で「今、子どもたちに自己肯定感を」と書いてみました。様々な青少年の事件、これを耳にしますときに、なぜ、どうして、どういう家庭なの？ どういう家に育ったからこうなったの？ という、皆様も疑問に持たれるかと思います。本当に悲惨な、考えられないような事件が起きております。この度も、17歳の子が小学校に行って先生を殺す、というようなこともありましたし、さらにそのもっと前では、佐世保の小学校では同級生を殺す、さらに前では酒鬼薔薇事件という、全く考えられないほどの行動がありました。

そういう行動に対して、どう考えたらよいのか、と考えたときに、もうこれははっきり申し上げて、「こういう家庭だから、だからなんですよ」っていうことは言えないと思います。複合的なものが含まれている。まず、それを前提に、私は感じ取っております。

もちろん、家庭が中核になります。子どもの権利条約、子どもがしっかりと人間として生きる権利に対して、子どもの人権として、家庭の親は、18歳までは責任を負わねばなりません。ですから、家庭での親の責任が中核にあると思いますが、それだけなんだろうか、と考えてみると、地域社会はどうなっている？ 学校教育はどうなっている？ 政治家たちはいかがですか？ そして日本のこれから動いていく

方針はどうですか?と考えると、本当に、複合的に、一人の子どもを中心に置いて考えなければいけない。

私も、今日これからお話しするのは、決して評論家として考えておりません。一人の母として、子どもたちと一緒に生活している、子どもの成長発達に責任を負う大人として、私にも責任がある。だから、聞いてください、一緒に考えましょう、そういう気持ちでやって参りました。さほど力もないのに、東京から参りましたのも、「一緒に考えて!大変なことになりますよ」と、そういう思いで参りました。

そこで、何を中心に、どういうことが子どもたちへの影響として考えねばならないんだろうと考えたときに、私は、この文章をまず、皆様に提示したいと思います。この文章は、もうすでに子どもたちの事件が起きますかなり前、もう言われ始めた頃のもんです。

1988年の東京目黒の中学生在が、両親・祖母を殺した事件です。一言で言えば、お母さんは、大変子どものためにと思って、教育的に熱心な方で、その熱心なお母さんが、一つの約束をします。学期末テストで平均点以下を1科目でもとったら、あなたにはお小遣いを1ヶ月減らします。2科目だったら2ヶ月。そういうわが子との約束がまずあった。で、確かにこの起きた事件は、7月10日、学期末です。あまりにも成績が芳しくなかったのも、お父さんに話します。お父さんはモーレツサラリーマン。話を聞けば、何てわが子は情けない、ということで、面と向かって随分お説教をします。そして、悶々としたこの少年は…。だいたい朝方起きるんです、事件というのは。4時すぎです。考えてるんです。苦しいんです。その苦しい思いをどうしたらいいかと、もう全く寝ないで。4時ぐらいまで起きてたら、朦朧としますよね?で、まず、お母さんのところに行って、ナイフで突き刺します。その悲鳴が聞こえたお父さん

が目を目覚めます。何事だ!あ、この人もだ、ということでお父さんも。そして下に寝ていたおばあちゃんも、という事件です。

この事件を私は新聞で読んだんです。そのとき私は目の前が真っ白になりました。どうしてこういうことをしてしまったの?って、もう他人事ではないんです。それからすぐあとに、朝日新聞の天声人語に、こういう言葉がありました。

「無残としか言いようがない。目黒の中学2年生による肉親3人殺害事件」

これ、一気に書いてあります。ですから、このコラムを書く論説委員も、怒りなんですね。無残!と書いてるんです。ここで、これから読むところで、どうぞ、指を折っていてください。四つのことが書かれていると思います。私はこの四点、これが保育を目指す皆様には、頭にいつも置いていていただきたい四つだなというふうに思っております。

「少年はサッカーが好きらしい。存分に走った後の快感を本当に知っていただろうか。アイドルに憧れたとも言ふ。音楽にじびれる体験を味わったのだろうか。真っ暗な山で夜を過ごしたことがあったのだろうか。夜明けの美しさ、花のかぐわしさを知っていただろうか。考えの違う人々と語り合うおもしろさを知っていただろうか。一つのことを人々とやり遂げたうれしさを知っていただろうか。勉強は勉強として、少年の興味や可能性の間口がもっと開かれていたら、どうだっただろう。少年の関心、間口、もっと広く世の中を見、社会を見、様々なことを考える少年だったら、このように追い込まれただろうか。」

この文章で終わってるんです。たまたまうちの息子が受験生でして、「お母さん、いい文章だね、これは。お母さんこのごろ目が見えないって言うから、

拡大してきてやったよ。」って、拡大した天声人語を私に渡してくれまして、「いい文章だ」って言ってくれたことに、私も「あ、あなたはこれを価値あるものとして受け止めた」私はうれしかった。「ありがとう」と言って、もらって、あれからずっと持ち歩いています。その息子も今や35歳になり、社会人として働いております。

四つ、どうぞ指を折っていただきたい。その四つの中に、私は今日は、二つのことをお話したいんです。

一つは、「考えの違う人々と語り合うおもしろさを知っていただろうか。一つのことを人々とやり遂げたうれしさを知っていただろうか。」

人間っていいんだよ、大丈夫だよ、力を合わせるってすてきなことだよ、っていうことを子どもたちに味わわせたいと思って、先生たちは幼児期、子どもたちの保育を、一生懸命組み立てていらっしゃいます。生活発表会、運動会、いろんな形で、子どもたちに「大丈夫だよ人間って。力を合わせるんだよ。」これは、人と人との関わり合い。

二つめは、「少年はサッカーが好きらしい。存分に走った後の快感を知っていただろうか。」

中学生ぐらいになりますと、食卓のテーブルの上にあるものを、私が箸で、「はい、みんな食べるのよ」と言って、同じ私の箸で渡すと、「お母さん、箸を変えてください。」などと言う息子が、「友達だよ」と言って、缶ジュースを、同じ口から飲み合ってるホームの姿を見ます。友達、お小遣い、これらは大切なものです。それを貰えなくなってしまう、これは深刻な事態です。同じ口をつけて、うれしい、その時間を、彼はとても痛ましかったと思います。まず、彼にとっては、私が思いますサッカーというのは、ああ、練習した、夕焼け空を眺めながら、今日一日終わったぜ、というこの快感、これは彼にとっては大きな意味で遊びの中だったと思います。遊びの中で

育つ子どもたちです。

三つめ、「真っ暗な山で夜を過ごしたことがあったらどうか。夜明けの美しさ、花のかぐわしさを知っていただろうか。」

自然との関わりです。今日は第2部「自然との関わり」で、本当に環境保育というお話を、私はしたいと思うのです。

そして、もう一つ、「アイドルに憧れたとも言う。音楽にしびれる体験を味わったどうか。」

文化との関わりです。文化というのはカルチャーです。カルチャーというのは語源がアグリカルチャーです。農業という意味です。農業というのは硬い地面に鋤を入れます。すると、そこに種を蒔いたとしたら、種とは全く姿の違うものが生まれ変わってきます。カルチャーとは新たな自分に生まれ変わる、という意味なんです。カッコいいものをいっぱいつけて、あら文化的ね、じゃないんです。内面から生まれ変わらなくちゃダメなんです。明日に向かって生きていくぞー、というこの喜びを持てる、それが文化なんです。

そう考えたときに、今日のお話は、第1部で「読み聞かせが育む力」ここのところで、文化、それが子どもたちに何を育てるのか、そこのお話をします。

以上四つというのは、人と人との関わり合い、二つ目には遊びの関わり合い、三つ目には自然との関わり合い、四つ目には文化との関わり合い。このことが人間になるために、必要なんです。勉強は勉強として必要だ。だけど、もっと、人間として幅広く問題関心を様々に持ちながら、そして、生きる喜びを、「明日に向かって生きるんだよ」ということを、励ますことが、私は教育であり保育だと思います。いつも希望を持つこと、それをどう、子どもたち一人ひとりに持たせてあげられるか。

このことが、今日の結論になりますけれど、絵本

というのは、子どもそれぞれに受け止めたときに、子どもに作者や画家は、生きるんだよ、と背中をポン!と押してるんです。だからポンと押すものがないと、子どもは勉強勉強勉強、「今日はまだ逆上がりできないの、あんたってダメな子ねえ、ほんとに困っちゃった子だわ」ばかりだと、「わたしは困っちゃった子だ」になるわけです。「自分というものは大切なんだ。」という、「わたしは明日に生きていくのに、先生も大丈夫よって言うてくれた。わたしはとっても必要なんだ。」ということ子どもに感じさせる、それにはどうしたらよいか。そのことで、私は“ベツェッティーノ”をご紹介します。

これは、私は学生たちに、一番最初の授業、要するに学生というのは、オリエンテーションで、どこ先生の授業をとるかっていうので、覗き見るわけです。そうすると4倍5倍の学生が窓から覗き込んでるわけです。私は「どうぞご覧ください、私これ、今日も1時間よ、1回目よ。」とやるわけです。学生たちにとっては、選ぶ授業なんです。最初に私はこう申します。「1年生、手を上げてください。」1年生は一般教養の授業です。共通教養の授業ですから、1年生が3分の2で一番多いんです。

1年生に向かって、私はこう言います。毎年言う言葉があります。1年生の皆さん、おめでとうじゃないんです。「よくぞ生きてこられました。」って言うんです。すると彼らの顔がピン!とします。「ああ、この先生、私たちのことわかってる。」授業が終わると私のところへすーっと来て、顔をまともに見るわけじゃないんです。「先生、あれ、気に入った。」と、こう言うんです。毎年一人二人いるんです。彼らのレポートを見ると、「公立の小中高の教師は権力者です。」っていう文章まで出てきます。「私たち生徒の上に胡坐をかいてるんです。」痛烈な言葉が出てきます。ここにいらしたらごめんなさい。でも、私も自分が公立の小学校の教師でしたから、それを言われたと

きに、私は本当に反省すべきところがいっぱいあります。私はやっぱり権力者だったな。彼らに向かって絶対的な顔をしてたな、と。

教師というのは、いのちと向かい合う仕事だ、私はいつも思っています。林竹二、宮城教育大学の学長であられた、林竹二がいつもおっしゃっていました。教師、教育、これは私の2巻目の本にも書きましたけれども、林先生の授業を私は大変感動して、受けたりもしましたし、本も読んだんですけれども、こういう言葉をおっしゃいます。『問いつづけてー教育とは何だろうか』径書房から出ています。その本の中に「教育とはギリシャ語でパイディア、魂の世話をするという意味だ。教師は子どもが生き生きと生きることを励ます。教師とはギリシャ語でベタゴグ。パイディアとベタゴグというギリシャ語から、どういうことが言えるか。教師と教育、日常的に子どもに付き添い、魂の世話をするという意味だ。」

どうぞ、日常的に子どもと向かい合い、その子その子一人ひとりのいのちと向かい合い、その世話をする仕事だ。古代ギリシャ奴隷制の時代に、学校に行くときに案内役をするのが教師だった。その道は危険な道ですから、どうぞこちらにいらっしやい、というのに、そこで鞭をふるうわけではない。まさに子どもに付き添うという意味。私は本当に自分が長いこと小学校の教師をしていて、思います。一人ひとりのいのちに付き添うことです、教師という仕事は。それは体罰とは関係ないことだ、と私は思っております。

今日これから読む“ベツェッティーノ”を原点にしながらお話します。ちょっと時間がかかります。ただ、最初にお断りいたします。絵本というのは、絵の本です。絵の本ですから、絵をしっかり見ていただくこと。字を見ないでください。「字を見ちゃいけないよ。」って子どもにはおっしゃること。絵をよーく見るのよ、と。そのうちに子どもは、絵を読んできま

す。絵を読む、このことはこれからもお話しますが、想像力、イマジネーションです。それが十分働かないと、絵本は楽しめないんですね。ですから、絵をよく見ていてください、字を見ないでください、ということをお皆さんにお願いしたいと思います。さらに、言葉というのは最小限度です。絵が大切です。だから絵本というんです。今から私は、最小限度に書かれた言葉を、さらにダイジェストにするということは、ものすごい、なんというか傲慢なことなんです。たくさん本をご紹介したいので、読む本もありますが、要約する本もあるということで、お許しください。これは、ちょっと語りでやっちゃいます。短くいたします。

『ベツェッティーノ　じぶんをみつけたぶぶんひんのはなし』　レオ＝レオーニ作

レオ＝レオーニをいつも訳されているのは谷川俊太郎、詩人でいらっしゃいます。非常に言葉が美しいんです。だからもう悔しいくらい、要約はできないんですが、お許しください。

彼の名前はベツェッティーノ、彼は自分が何者であるかがわからない。自分探しの旅を始めます。最初に出会った人は走ることに上手な人。

「もしもし、ぼくはきみのぶぶんひんでしょうか？」

すると、走ることに上手な人は言います。

「ぶぶんひんがたりなくてはしれるか？」

この言葉が繰り返されますから。

次に行ったのは強い人。

「もしもし、ぼくはきみのぶぶんひんでしょうか？」

強い人が言います。

「ぶぶんひんがたりなくて、つよくなれるか？」

泳ぐことに上手な人にも同じ言葉、そして登ることに上手な人にも同じ言葉。飛ぶことに上手な人に

も同じ言葉。

はい、ここで絵本の特徴の一つ、同じ言葉が繰り返されてくる。このことで、話の内容がぐんぐん膨らむんです。

最後に行ったのは賢い人のところだった。賢い人は言った。

「こなごなじまへいってみろ。」

そこでベツェッティーノは船に乗って、大急ぎで、こなごなじまに行きます。着いてみると、もう岩だらけ。木は一本もはえていない。ベツェッティーノはこの岩だらけのところを登ります。のぼったりおりたり、とうとう、つかれはてて、けつまずき、ころがりおちた…

で、文章が……となっています。ですから、読み方です。「ころがりおちたー」というんじゃないんです。大根切る、で終わりじゃないんです。「ころがりおちた……」まだ……ですよ。「すぐに言葉を言うな」って指示がちゃんとあるんです。ですから、絵本の場合は絵巻物ですから、最初は。絵はつながっていくんですから、切るところと、切ってはいけないところがあることを、やはり吟味してください。ここでは、「ころがりおちた……」

しばらくおきます。

そして、こなごなになってしまった。かしこいやつは正しかった。やっとベツェッティーノにもわかった。自分もみんなと同じように、部分品が集まってできているのだということを。誰かの部分品ではない。私は部分品が集まって、私ができているのだ。わかったベツェッティーノは大急ぎでみんなのところに帰ります。みんなは待っていてくれました。ベツェッティーノは大きな声で言います。

「ぼくは　ぼくなんだ！」

周りの仲間たちは、何のことかわからないけれど、ベツェッティーノがうれしそうだったから、みんなもうれしかったのさ。

こういうお話です。みなさんいかがですか？この“ベツエッティーノ”は受けに受けますよ、今若者に。私は中学でも絵本の授業をします。高校でも絵本の授業をします。これは必ず持っていくます。「あなたはあなたなんですよ。だれかの部分品じゃない」そうするとね、涙出す子がいます。母親の言う通り生きてきた。母親の笑顔がうれしくて生きてきた。だけど、そうじゃないんだよね。・・・ぼくはぼくなんだよ。ベツエッティーノがそこに到達するには時間がかかったけれど、「ぼくも中学の時、母を殴ろうとしたとき、母と決別した。」私の3冊目の本にそのレポートがあります。時間があったら読んでください。

ぼくはぼくなんだ。今、私ども、仲間たちと話すときに、若者が一番つらいのは、自分は自分で、自分を好きになる、私は私でいい、ということの自己肯定感が持てない若者たち、自信が持てない、その若者たちがあまりにも多いことです。

今思い出しますが、阪神大震災がありましたときです。私は絵本ゼミというのをやっています。非常勤講師はゼミは持てないんですが、学生たちの要望で、じゃあやりましょうというんで、やります。熱心な、幼い日々絵本をいっぱい読んでもらった、その子たちが集まってきました。その子たちの中に提案したんです。阪神大震災、みんなで行きましょう！って。一番元気がいいのは私なんです。そうしたら一人の女性、4年生、「私、卒業旅行を考えていたけど、そのお金を阪神に使います。」女の子がパッと言いました。で、じゃあ私も行く、ってなりました。で、一人の男の子、「僕なんかが行って、足手まといではないでしょうか。」そしたら、横にいた1年生、「その場で瞬間、考えればいいんであって、前から考えてられないじゃないの、どういう状況か、わからないんだから。行こ、行こ！」って言ったけれど、彼は「やっぱり止めます。」

私は大変印象的でした。その彼のレポートは、

「僕はずっと母の笑顔が目標でした。よくがんばったわね、ってお母さんが言うのが目標でした。」でも、4年生になって、彼と、廊下のはじの方で会ったとき、私が「はい！」って手を上げたんです。何も返事することないんですけど、「はい！」ってやったら、彼はいい顔してましたから、やっぱり、大学っていうところは仲間を見つけるところだ、そして、自分の将来を考えるとこなんだ、っていうふうに思って、私も元気をもらいました。

さて、これはぜひ現場に行かれたら、お母さんたちに読んでいただきたい。“いいこってどんなこ？”

「お母さん」ってこうおっしゃって、「お母さん、ここにね、バニーほうやがいろんな質問するからね、お母さん、心の中で答えていてくださいよ。声出さないのよ、いいのよ。ね、あなただったらどう答える？」

学級懇談会でぜひぜひお母さんたちに読んでください。そうすると、泣き出すお母さんがいるの。泣き出すお母さん、私何回もこれ読んでますからわかるのね、自分が幼い日々、愛されなかったお母さん。泣きますよ。鼻の頭が赤くなって、目にいっぱい涙が出てきます。そういうことはね、保育者としてわからなきゃだめ。そうすると、そのお母さんはわが子を愛せないっていう場合もある。わが子が多動であるということもある。「何ですか、あなたのしつけが悪いんですよ」じゃないんです。お母さん自身が幼い日々、まさに高度成長の時期に幼い時だったんです。今20代30代は苦しいんです。偏差値教育で育ってきました。共通一次です。もう、点数第一ですもの。そのお母さんが泣き出すのはもっともなのです。で、そのお母さんってどんな人かなあ、っていうのがわかる、それがわかってお母さんを理解する。もう絵本は子どものためじゃないです。大人へのメッセージでもあるんです。子どもへのメッセ

ージ、これをわかっていただきたい。

『いいこってどんなこ?』 ジーン・モデシット文
ロビン・スポワート絵

いいこってどんなこ? わたしたちみんなに
そこで止まってます。そこで私は考えた。「わた
したちみんなに」ジーン・モデシットはささげたい
て言ってるんだな。これで終わってるんだから。そ
こからまた私は考えた。言葉というのは、言葉
霊って言います。いのちである。その人の思いである。だ
から、言葉をその人が言うということは、相手の心
に寄り添うことなんです。言葉。だから自分が言葉
を出すということは、真実を語ることなんです。そし
て自分の心を語ることなんです。それが今や、本当
に、言葉、生の言葉を、たくさんたくさん、子どもた
ちはかけられて育っているだろうか。親の言葉をい
っぱいいっぱい、体中に、ボイスシャワーを浴びて、
育っているだろうか。機械音ばかりではないだろ
うか。ディスプレイ依存症。画面だけで育ってない
だろうか。私はそここのところに、本当に子どもたち
が育ちそびれているという部分がたくさんあるよう
な気がします。

じゃあ、読みますよ。答えてください、心の中に。

「ねえおかあさん」ウサギのバニーぼうやがたずね
ました。「いいこってどんなこ? ぜったいなかないの
がいいこなの? ぼく、なかないようにしたほうがいい?」

お母さんは答えます。「ないたっていいのよ。でもね、
バニーがないと、なんだかお母さんまでかな
しくなるわ。」

「じゃあ、いいこってつよいこのこと? なんにもこわ
がらないつよいこになってほしい?」

どうぞ見てください。クモの巣の中のクモをバニ
ーは怖いって言ってるでしょ? でも、ここには言葉は
いらないます。絵が描いてあったら言葉はいらな
い。ですから、絵本とは一人で読む本じゃないん
です。子どもには絵をよく見てるのよ、字は先生や
お母さんがあなたの耳に届けますよ。同時進行に
見ててください。聞くことと見ることを同時にするも
んです。言葉と絵、これを子どもたちにさせてくだ
さい。子どもは自然にやってます。

「まあ、バニーったら、こわいものがないひとなんて
いるかしら」

「おこりんぼはいいこじゃないよね。ぶんぶんおこ
ってるぼくなんか、おかあさん、きらいでしょ?」

「とんでもない、ぶんぶんおこってるときも、にこに
こわらってるときも、おかあさんはバニーがだいすき
よ」

「でもぼくがばかなことばかりしていると、おかあさ
ん、いやんなっちゃうよね」

「どんなにおばかさんでも、バニーはおかあさんのた
からもの」

「びっくりするようなおばかさんでも?」

「どんなにあきれるほどのおばかさんでもよ」

「そいじゃぼくがもっとかわいかったら、おかあさんう
れしかった?」

「まさか」おかあさんは首をふりました。「バニーはい
まのまんまでいいの」

小さなバニーは、だまってしばらく考えました。「じゃ
あおかあさんは、ぼくがどんなこだったら、いちばん
うれしい?」

おかあさんはにっこりわらってこたえました。「バニー
はバニーらしくしてくれるのがいちばんよ。だってお
かあさんはいまのバニーがだいすきなんですもの。」

ゆっくり読んであげてください。私は一冊でも多

く紹介したいから、ものすごく心臓が苦しいくらい急ぎますが。言葉は消えてしまいます。ですから、ほんとにゆっくりね、それをお願いしたいんです。

「バニー、バニーの、あなたのまるごとが、かあさんのたからものなの。何かができるバニーじゃないわ。お絵かきが上手、そしてピアノが上手、もちろんおかあさんもうれしい。だけれどね、あなたが生きてくれること、それがおかあさんにとっては一番うれしいことなのよ。」

親はみんなそう思っています。でも、がんばりなさい、もっとがんばりなさい、の言葉で、子どもは、母さんの喜ぶようにがんばろうとしたとき、自分を見つめるという時間もなく、母さんの笑顔に向かっていくのです。親は権力者です。親の言うことを聞かなかったら、自分は生きていられないってことを知っています。子どもは実にけなげです。

私は自分がずっとボランティア活動で、図書館とか公民館とか何とかセンターで、絵本の読み聞かせなんかもしていました。子どもが熱があると、子どもを連れて行けない。「あなた、ここで寝ててね」と言いながら、お約束の図書館に行って、絵本を読んで帰ってくる。すると、玄関のところで、熱があるのにじっと我慢をされていて、私がドアを開けると、パーンと私に飛びついてまいりました。「ごめん、ごめん、ごめん」って。「がんばっていたのね、ありがとう」って。

中学に行ったとき、その息子がこう申しました。「母さん、母さんが帰ってくる道が僕はわかるから、母さんのハンカチは一番上の引き出しに入ってることを知ってるから、母さんの匂いを嗅いで、道の方角を見てたんだよ。」そのときは言わなかった。中学の時言った。そのとき私は、「ああ、そうだった。あなたの心をどんなにか寂しい思いをさせてたんだよね、ごめんよ。」って。そんなこともありました。私

は大変何か、かっこよくお話ししますが、3人の子どもを、時に寂しい思いをさせ、本当に子どもたちにとっては、時として良くない母であった。実は、反省をこめてお話ししてるんです、全部。ですから、かっこいい話を、みんなできないということです。

まず一番に、「ほんとにあなたはあなた、大切な子なのよ」っていうことを、子どもに感じさせないといけません。言葉で言うだけじゃだめです。感じることです、子どもは。

そこで、第二です。読み聞かせが育む力、それは親に読んでもらうこと。結論を申し上げます。二つあります。親が子どもに本を読む、それは何であるのか。それはまず一つは、子どもにとって、親の声を聞いている時間なんです。先生の声の聞いている時間です。そのことは、子どもにとって何よりもうれしいんです。自分のために、母さんは本を読んでくれる。そのことが自分に向かっている親、これをぜひ現場に行かれたら伝えてください。

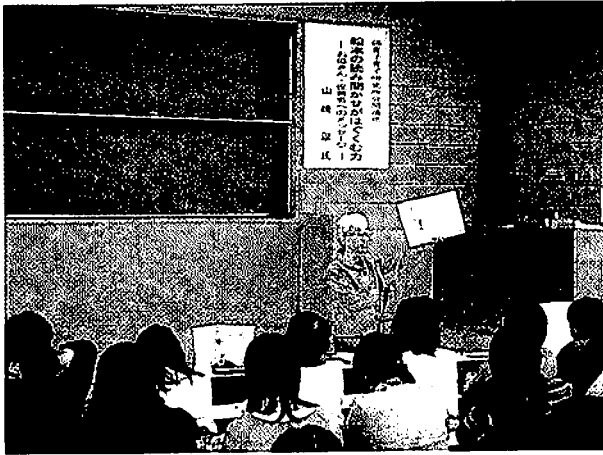
親からは、「何で私は本ばかり読まなきゃいけないか」って言われたら、「あなたの声を聞かせてやってください。それは、お子さんの心の奥深くのひだに、あなたの声は引き出しのように溜まっていくんです。」

そしてつらいとき、これは感情論じゃありません。実際、中学高校に行って、勉強しても勉強しても成績が取れないとき、「先公だってよう、かっこいいことしか言わないんだよ。やっぱり勉強できるやつしかさあ。」そういう自暴自棄になったとき、目をつぶったときに聞こえてくるのは親の声です。そのときに、親の声が聞こえてきたときにはあったかーい気持ちになるんです。暖かい気持ちになったときに、自らのいのちを絶つことは、明日にしよう、今じゃない、と思ったとき、親を悲しませたくない、これが一つの、もうやっぱりやめよう!と思う引き金になってほしい

と思います。

そのところで、私はいつも思うんです。子どもというのは親の声を聞きたがっています。命令と禁止の声じゃなくて、本を読んでいる母さん父さんは、一番優しい声なの。おなかの中で聞いてた声なんです。怒って本は読めませんもの。本を読むときは、自然の声で読めます。それを子どもに伝えてやっていただきたい、ということが一点。

もう一つは、二つ目に書きましたが、言葉を伝えることは、絵本の言葉を伝えることは、そこには全ての言葉が書いてあるわけじゃありませんので、想像しながら、イメージーションを働かせながら聞いています。そのことが、様々なことに対して、見えぬものを見る力になっていきます。三つ目に、そのことが、想像力を働かせ、生きる力とつながっていく。では、絵本で紹介していきます。



早期教育ではありませんが、ブックスタートということがあります。こちらではどうされていますか？私は、福井郡福井町の保健センターで、15年前から、マタニティーのクラスの方に絵本の話をして、すると、お腹の中の赤ちゃん、聞いてるんです。もうお腹の赤ちゃん、ぐるんぐるん動く。そうすると自然に、お母さん、お腹に手がいきます。そして、「先生、聞いてます、動いてます。」って言うんです。それを、今度ビデオを作りました。

そして今度は3ヶ月から6ヶ月の赤ちゃんに絵本を

読みます。お腹で聞いてた赤ちゃんが生まれてきて、その赤ちゃんに絵本を私がまた読むんです。笑顔がいいんです。それから絵本をニコニコしながら聞いてるんです。0歳の赤ちゃんには絵本無理でしょう、そんなことないです。3ヶ月ぐらいから焦点合ってきます。そしてやっぱり4ヶ月の方がはっきりします。6ヶ月になると本を触りにきます。これだけの発達が出てくるんです。そのときに、私は一番やるのは、「ころころころ」なの。同じ言葉の繰り返し。これ意味なくって、音の響きを聞いてるんです。ではいきましょう。

これは難しい絵本です。「ころころころ」しかないんです。どこも「ころころ」しかないんです。私が一番最初に読んだのは、小学校3年生の子に読みました。3年生って元気いいでしょ？でこれは「ころころころ」しかないから、何か面白くなくって、教室から飛び出てっちゃうかなと思って、「頼むから出ないでください」という思いで。私は15年間わが子に、毎晩毎晩本を読んできた。これを親子読書って言います。その親子読書の感覚、それでやってみようか、と思って。「ころころころ」ってじっとしてるんじゃない。

ですから、本というのは、この世に出たら一人歩きしてますから、あなたのやり方でいいんです。こうやらねばなりません、ということは、全くありません。あなたのやり方。「ころころ」を10人が読んだら、全部10通りの読み方になります。それでいいんです。会場の方から質問が出ます。「あまり感情を込めないで、というふうな講師もいますが、山崎先生は少々感情が入りすぎるのではないのでしょうか。」という。先に言うておきます。言われそうな気がしてるわけじゃないんですけど。私は自然体です。自然体、それ以上のなにものでもない。ということで、あなたの思いで読んでください。

こんなふうに読んでみました。いかがでしょうか。

(元永定正・作)

[…略…]

ありがとうございました。これ読むと、恥ずかしいんです。

もう一冊読んでみます。ここで感じ取ってください。お腹の赤ちゃんというのは、動きも、形も、全部感じるものなんだなということだと思います。赤ちゃんは意味は全くわからない、お腹の中で。でも聞こえているんです。そして、動くんです。とても心地よく動いてくれたようです。

絵本というものは、一つは、先ほど申しました、繰り返す言葉があります。「ころころころころころ…」ですね。でもそれが見えるんです。言葉っていうのは響きで、見えるんです。

二つ目には、リズムです。非常にリズムカルです、言葉は。日本語のリズムを、子どもたちにきちっと伝えたいものです。心地がいいということなんです。ですから寝る前に親が読んでくれる、かつては子守唄を聞きながら寝たこどもたち。寝ている時間も成長しているんですから。子どもはゆっくりと寝てくれる。子守唄の中には残酷なものもありますが、静かに繰り返すリズム、それが子どもには良かったんだと思います。

元永定正とおっしゃる方、先ほどのころころの作者ですが、今度は金関寿雄、ちょっとそこに入れませんでした。ごめんなさい。“カニツンツン”これは、非常に言葉のリズムというものをお話するのにいいなと思って、今日は持ってまいりました。“カニツンツン”というんです。カタカナです。この中にはイタリア語、アイヌ語、英語、インディアン語、日本語が出てまいります。お分かりになるでしょうか？私はこれ、“こどものとも”として、福音館から月刊絵本として出たときに、これ難しいから止めた、って文庫の子どもたちに読まなかったんです。そしたら、お母さんたちが「今度の本はすごく読みにくいけど、山

崎さん読んで」って言われました。そして「一週間待ってください」と言って、一週間練習して、読むことにいたしました。

金関寿雄先生は、この“絵本の楽しみ”っていう中に説明があります。この方は、言語芸術の可能性を求められた、追求された、言語芸術の研究者です。それで、おもしろいものを書く元永さんと一緒になって、お二人が話し合われたそうです。ここに書いてあります。「何かこう、リズムのある言葉の組み合わせの、楽しいの作ろうか、二人で。子どもにとって絵本は楽しいってことが必要ですね。」って、こう二人がアメリカで話されたんですって。それで、「そうですね」って。いつまでたっても原稿が来ないんです。で、元永先生は絵を描きたいのにまだ来ない、って待ってらした。大変、ご病気が重くなられて、枕元にはこう、言葉を書きながら、つらい思いをしてらした。結局、この本が出来上がるのをご存じなく、お別れになってしまったと、書いてあります。

『カニツンツン ツンツン』 金関寿雄 文
元永定正 絵

これをどう読むか、ものすごく私は悩みました。そしたら、何となく思ってた言葉がこれなんです。「カニツンツン ビーツンツン ツンツンツンツン」これ、私アーツと。私北海道に10年おりました。アイヌの民話集の中に、この言葉があるってことを見つけたんです。パナンペ爺さんとペナンペ爺さんの話で、アイヌの方々是小鳥のさえずる声が聞こえるんです、「カニツンツン ビーツンツン ツンツンツンツン」って。で、この民話集の中に、ペナンペ爺さんの腹の中に小鳥が入ってしまったら、腹からこういう音が聞こえるっていう、昔、民話集がございますので、私は調べてみたら、アイヌ民話集の中にありました。なるほど。それからもう一つは、会場の方から教え

ていただいたんですが、「ピーカブー ピリピリピリ
ピリ」これは、アメリカで、「ピーカブー」って言うんだ
そうです、「いないいないばあ」を。英語で書いてあ
る。

私、これはどうやって読むかが、非常に悩みでし
た。「シングパパゲノ」ってところです。これはど
う読んでいいのか、自分じゃわからないので、「シン
グパパゲノ シングパパゲナ パパバ パパ」そし
たら、授業で学生の中に二人手が挙がりました。び
っくりしたんです。「先生、今度CD持ってくるから」っ
て言うんです。「私たち歌いました」って言うんです。
モーツァルトの魔笛の一節なんです。「へえー、すご
いわね、あなた」って言ったら、「聞きなさい」って持
ってきてくれました。それで聞いたら、なかなか「パ
ッパ」が出てこないんですね。たまたまその時期に、
東京都中央区で、歌劇「魔笛」がありました。私は
急いで行って、その歌劇を見て、またぱーっと帰っ
てくるっていうような状態で、何とかして、この、ど
ういう音を出したらいいか…。そしたらやっぱり、「シン
グパパゲノ シングパパゲナ」というのは、ここに
解説書があるんです、実は。ちゃんと解説が書いて
ありますので、わかるんですが、「パパゲノ」と「パパ
ゲナ」の男性と女性のデュエットなんです。モーツ
ァルトの歌劇「魔笛」の鳥打男パパゲノとその恋人パ
パゲナのデュエットって書いてあるんです。ああそ
うなんですかねえ、っていうんで、曲を聴きに行っ
て、「パッパ」がいつくるかなあ、なんて、そんなんじ
ゃだめですねえ。

それから一つだけ、私にも何となくわかったのが、
皆様もおわかりになるでしょう、「モティティッティ ヤ
オテバ ニゲロ」餅についてニャオと鳴いたら逃げ
なさい。アイヌ語です。これね、おもしろいですよ。
3歳児に読みました。黙ってます。今度は5歳児に
読みました。「もっかい」って言いました。そして、「モ
ティティッティ ヤオテバ ニゲロ」は2回で覚えちゃ

いましたよ。子どもってすごいですよ。そして、「ダー
ッ」なんてやってんです。5歳児はもう、げらげら笑っ
てました。それだけ、言葉の発達の体験、そういう
ものが違ってくるんです。

私は結構、子どもたちに教わりたいために、同じ
本を3歳児、4歳児、5歳児って読むことにしていま
す。何歳児向け、っていうのは私、反対です。それ
はおかしい。それは出版社が売れるために書いて
るんです。だって、この年齢から下の子には無理だ
と、言えましょう？たとえば“ひとまねこざる”を2歳
児に読むには、これは生活体験が伴わないとげら
げら笑いませんから、これは読む人いないと思うん
です。でも、3歳あたりから読み始めて、一番、子ど
もの体験から見たら4歳、5歳でしょう。非常にこれ
は体験を伴うと楽しいです。ということはあって、こ
れは0歳児には無理ね、はあっても、何歳向きとか、
何歳以上とかというのはないです。

最近私は、シルバーの方に絵本の話をしている
んです。シルバーの方の現場に行って、絵本の読み
聞かせをさせていただくという、東京都老人総合研
究所が、お年を召した方に読み聞かせをするとい
うことが、前頭前野を活性化させて、生き生き、コ
ロリン、とっていただくために、介護保険を節約
するために、それを今、始めていまして、おそらく5
月か6月、1年間の報告があると思います。それでま
た、今年の5月、第2次募集をすることになっていま
す。

非常に元気いいですよ。80の方も生き生きされ
ます。生き生きして、グループ10人で。そこには三
つ必要なんです。これは私の持論です。10人のグ
ループが関わり合いながらやらなきゃだめです。一
人だけやっててはだめなんです。関わるってことは
神経使うんです。悩むんです。思う通りにならない
んです。そうやって悩まなければ、人間は成長しな
い。二つ目、やっぱり声を出すことです。三つ目、ど

ういう本を選んだらよいか、何歳ぐらいだったらこれはどうか。これはもう、相当本を読んだ上で、これって決めなきゃだめです。ですから、相当図書館に行って調べたり、勉強したりして。勉強して、声を出して、仲間と共に。この三拍子です。

最近行きましたら、面白いことを発見しました。30人、10人ずつのグループですが、一番生き生きしているグループは、男性がお一人入ってるグループなんです。いやアステキですよ。みんなステキ。その中のお一人の男性の方が、まるっきり生まれ変わっちゃった。「もう、楽しくて楽しくてしょうがありません。9人の女性に囲まれて。」って言う。女性だけのグループさんも、もちろん元気はいいんですけども、全く違った雰囲気です。やっぱり男性も入っていただかなきゃいけないと思います。

子どもたちに声を聞かせること、それは愛の体験だ。読んでもらってる時間の中に成立するんだ。もう一つ重要なこと、読み聞かせが育む力、言葉の力、想像の力です。感性、思考力です。この感性を伴わないと、環境保育はできないんです、実は。ですから、感性ということであり、想像力です。

これ見てください。“おおきなかぶ”1年生の国語の教科書にあります。私の息子が言ったんです。「お母さん、教科書はつまらんね。」「どうして?」「縦長だもん。おおきなかぶが縦長とはね。やっぱりこれ、横長でよかったね。だってね、おかあさん、おおきなかぶって言うから、ここに絵がないんじゃない?」って言ったんです。これは大変な発見です。「ぼくの心の中に絵が描けるだろ?」それで勉強してきたら、私はわかったんです。佐藤忠良は彫刻家でいらっしゃるけれど、絵もお描きになる方で、あえて、描いてないんです。切り落とし手法。あなたの想像力で広げてください、って言ってる。ですから、全部切り落としてます。どこのページもおおきなかぶは切

り落としてる。飛び出ちゃってる。ですから「入りきりませーん」って言ってるわけでしょ?これ。最後なんかもう、「やっとかぶは抜けました」って言ったって、やっぱり切り落としてますよ。ここのところを私は発見しました。切り落とし手法。すると子どもは、おおきいー!っていうイメージを持つんです。おおきいというイメージです。

子どもというのは、いかに想像しながら読むかというのを、この場面ですが、「おばあさんは孫をよんできました。」っていうとき、ここがいいですね。右の端をご覧ください。私の息子が1年生のときです。「お母さん、読んだらすぐめくるだろ?だめ。ほく、ここしか見てなかったのに、お母さんめくっちゃうんだもん。だめだよ。おじいさんの手の指の先を見ろ。」って言ったんです。「パターンとなってるだろ?これ、おじいさん困ったって言ってるじゃないか」って言うんです。このように、絵を読むということです。それを子どもは、やってる。そのことが、見えないものを見えるということ。これは人間にできる素晴らしい力です。想像力。今日おっしゃったあの方の声は、どうも静かだな、いつもと違う、何か苦しんでらっしゃる。声の響きで、その人の心がある程度想像できます。でも、パソコンで出てくる、「あんたなんかキライ」と書いた子を、「殺そう」と決心するわけです。「嫌い」って言葉を、「あんたなんかキライ!」とこう言えば、「普通好きだけどさ、今そういうこと言われたらわたし、いやだよ」というのと、「キライ!」とネットに書かれたのと、全然違うんです。だから、そのところを私たちはやっぱり考えなきゃいけないと思います。

私の結論。小学生にパソコン教育いらない。いかがでしょうか。最近ちょこっと新聞に出るようになりましたが、私は、前から言ってるんです。先生方、右往左往してます、「パソコン教育しなきゃなんない」って。「総合学習やんなきゃいけない」、いや、「総合

学習はもう止めようじゃないか」と。週休2日になったので、小学生の学力がどんどん落ちてきたから大変だ、と。何でそんなにどんどん、どんどん、教育を変えようとするんでしょうか。本当におかしいと思います。子どもたちが全て犠牲者です。

皆さんは、若い方であり、私は一言申し上げたい。去年の8月6日、前の8月5日でした。国谷さんのクローズアップ現代(NHK)を私は毎日見えています。去年の8月5日、広島公園からの大江健三郎さんとの対談でした。公園を背にして、明日は広島原爆記念の日です。最後に国谷さんが大江健三郎さんに聞いたんです。「私たちはこれだけの大変なことを経験した。若者たちにどう伝えたらよいのでしょうか。戦後生まれの若者たち。戦争体験がありません。」国谷さんは、もう、本当に真実こめて、「どう伝えたらよいでしょう」っておっしゃったとき、大江さんがおっしゃったことは、「記憶と想像です。それなら誰でもできるでしょう。あの広島に原爆が落ち、長崎に原爆が落ちた。そのときの悲惨な状態っていうのは、きちっと知らされている、としたならば、そのことを身体にしっかりと記憶し、そしてそこで死んでいった人たちに、想像を働かせることはできるじゃありませんか。」とおっしゃいました。

想像力。ワイツゼッカーが戦後40年、ドイツ大統領として、議会でおっしゃった、「心に刻む」という言葉。「戦後、ドイツがユダヤの方々にどれだけのことをしたか、戦後生まれの人たちに責任を負いなさい、ということは無理かもしれません。しかし、戦後生まれの人々にも想像することはできるはずです。歴史を学ぶことはできるはずです。歴史をしっかりと学び、それを記憶に残し、それをしない人間は未来に盲目になります。」有名な言葉です。「心に刻む」というワイツゼッカーの言葉。これはやっぱり、私たちにはできるはずです。それをしっかりと、まさ

にこの“おおきなこぶ”からできるわけです。

「何で絵本を読むの？」子どもたちに、声で伝えてください。子どもたちは絵が描いてないところを想像しながら、翼をたくさん広げていくんです。そのことが人間にはできるんです。それを静かにゆっくりとやらねば、子どもたちは見えるものしか信じない。そうなったらどうなるのでしょうか。

3番の「心を耕す」生きる力 もう今まで申し上げたことに尽きると思います。体力、これは人間にとって生きるために必要です。だから、食の問題、運動の問題は重要です。もう一つ、心のエネルギーです。心ワクワク、ドキドキ、キュン、チュツ、パツという、心を動かすということ。このことが、学校教育の中で押さえつけられてきませんでしたか? 「やつはうれしいと飛び上がるぜ。なーんだ、かっこつけやがって」だから、貝が蓋をするように、若者たちは自分を表現しようとしません。文章を書きなさいっていうと、いっぱい書きます。短い時間の中でみごとです。だけど、発言っていうと、躊躇してしまう。目立たないように目立たないように、生きてきた。本当に悔しいです。あなたは自分を出してごらんない。そうしながら、仲間を見つけていこうじゃないか。私はいつもそう思います。

そういう中で生きる力には体力、それは身体のエネルギー。もう一つは心のエネルギー、それは文化です。文化とは明日に生きる力です。時間がどんどん過ぎていきます。一つだけ取り上げます。私の息子が、この“ひとまねこざる”を大好きでした。なぜ“ひとまねこざる”が好きか? それを私は、リリアン・スミスという児童文学論を書いた方から学ぶことができました。ぜひ読んでください。これは古典になると思います。岩波書店から出ております。

ちょっと見てください。“ひとまねこざる”で育った方もいると思いますが、簡単に申し上げます。息子

いわね。」って。はい、来たかって思いました。「私は、夢を持ってるよ。地球上の全ての人が生きていく世の中を作らなかったら、まず地球が減じる前に、生き物である人間が死んでいくでしょう。」って私は思っています。

[・・・]

皆様はどうお考えになるでしょうか。マータイさんが前の大統領、前政権のときに、何度も牢獄に繋がれました。そして、虐待を受けたとき、マータイさんは何をおっしゃったか。「私はいかなる虐待を受けようとも、私には希望がある。私は死んではいけない。死なない。木を植えて、本当にやらなければならないことが、私にはあります。すべての人に希望がある。私にも希望があります。」前の主人は当時の政権下の国会議員だったんです。ですから、全部森林を切って、農業をし、コーヒー園をし、トウモロコシ畑にするという、政権派でした。ですから、マータイさんはご主人と別れて、3人の子どもを連れられたんです。全く正反対の考え方です。そんなことを考えますとき、どうぞ若い皆さんも真剣に考えていただきたい。これからが本番でございまして。

もう一つ、皆さんにお伝えしたいのが、“わたしと地球の約束”っていうセヴァンちゃんの本があります。今大学院の学生でいらっしゃるセヴァンちゃんは、幼いときから、魚を獲って育てて、12歳のとき、何と、こういう題で、リオデジャネイロの国連の環境サミットで、6分間のスピーチをします。そのスピーチの全文がここにあります。「どうやって直すのかわからないものを、壊し続けるのはもう止めてください。あなた方はここまで生きてきましたけど、私たちはこれから生きるものです。私たちの子どものことを考えてください。」と言うんです。「環境運動、このことをエコと言います。」と言って、堂々と12歳のセヴァンちゃんが発言するんです。そしたら、そこで聞いて

いた人たちがみんな泣き出したそうです。そして立ち上がって拍手をしたという、その情景を書いていらっしゃると思います。お読みになりたい方は読んでみていただきたいと思います。

私がこれから話しますことは、実は皆様にはぜひ読んでいただきたい、「センス・オブ・ワンダー」レイチェル・カーソンです。お読みになった方、どのくらいいらっしゃるでしょうか？私は、これ自分の本なんです。が、全部付箋になっちゃったら、どこが重要かわかんなくなっちゃうくらい。ほんと、私はこれは何度も何度も読んでいます。学生には教科書として読んでもらうようにしております。レイチェルは、亡くなってもう、長いんですけども、レイチェル・カーソンの“センス・オブ・ワンダー”、最初が“沈黙の春”これは、環境問題の最初の告発書です。

資料がたくさんあるんですが、レイチェルが言い残して亡くなったことを申し上げます。今から40数年前に“沈黙の春”というのを、4年間かけて書きます。レイチェルは、生まれたのは海の傍ではなかったもんですから、自分は小説家になりたいと思ったんですけど、家庭の事情で、海の近くの海洋研究所の広報担当になりました。広報担当のレイチェルは、大変ものを書くことがお上手で、ベストセラーを何冊も書いていらっしゃいます。「海辺」とかですね、海に関する作品をたくさん書いていらっしゃるんですね。で、レイチェルが最初に書いた本が“沈黙の春”です。これは環境の最初の告発書ですから、この本はぜひ読んでください。“センス・オブ・ワンダー”は、ご自分が亡くなって1年後に、仲間たちがレイチェルの心を、雑誌に書き残したものを本にしたのが、これなんです。

レイチェルはどういうことを言っているかといいますと、ご自分のところに、ある主婦から、1950年代アメリカでは化学物質が大量に開発されて、ヘリコ

プターで農薬を散布していました。その時代に、「コマツグミが私の庭に14匹来て、全部死にました。これは何事ですか?」という手紙がレイチェルのところに来ます。そこでレイチェルは調べ上げる。そんな農薬空中散布、そのことが動機になりまして、この“沈黙の春”は二つの視点から書いてあります。農薬や殺虫剤など、化学物質による生態系の汚染、その警告。二つ目は自然と人間の共生の問題、このことを提案しています。この本から、私たちは化学物質というものがいかに生命を脅かしているのか、ということに気がつきます。

レイチェルが言っています。「子どもたちに手渡すとき、子どもたちに手渡す一番大切な贈り物、それは美しいもの、未知なるもの、神秘的なるものに目を見張る感性、センス・オブ・ワンダー」このことを子どもと一緒に、どうぞ探し当てていただきたい。それをなくしては、子どもたちに、地球を救う道はない、と言っています。私がとても好きな言葉がありますが、この言葉です。「もしわたしが、すべての善良なる妖精に話しかけ、お願いすることができたら、世界中の人たちに、生涯消えることのないセンス・オブ・ワンダー、神秘さや不思議さに目を見張る感性を授けてほしい、と頼むでしょう。」しかし、年齢を重ねるごとに、その感性は摩滅していきます。まあ、しょうがないじゃない、ということになっていきます。どうぞ、子どもと一緒にいろんなものを体験し、そして、感動を呼び覚ましてください。

私が大変、頭をぶたれたところの文章を読みます。「子どもにとってどのように教育すべきか、頭を悩ませている親に申し上げたい。知ることは感じることの半分も重要ではありません。」日本の教育は知ることでした。感じることの半分も重要でない。「子どもたちが出会う事実の一つ一つがやがて知識や知恵を生み出す種だとしたら、様々な感受性はこの種を育む肥沃な土壌です。」幼い子ども時

代、この土壌を耕すことです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいもの未知なるものに触れたときの感激、思いやり、哀れみ、様々な感情がひとたび呼び覚まされると、これは何だ? 知りたい、と思うでしょう。そうしたときに、しっかりと知識は身につくのです。先に知識ありではありません。日本の教育は逆転している。そのことに気がついてほしいと思います。親として、子どもと一緒に空を見上げてごらんさい、真夜中の海に立ってごらんさい。海洋生物学者ですから、ロジャーという1歳8ヶ月の親戚の子どもを連れて、海に立ちます。「輝く月の光を、水面のキラキラするところを、夜中に見つめてください。明日寝坊するからなんて、そんなこと考えるんじゃない。」今ここが大切なんです。今この大切さを、どうぞ味わっていただきたい、ということ、盛んにおっしゃっています。

私はこのレイチェルの言葉を受けて、これはもう、かなり前に本を読みまして、そこから私自身が、「環境保育ってどうあることか」と言ったときに、「いのちにふるえる感性を」というビデオを作ったんです。何よりも大切なことは、まず現実を知ること、事実を知ること、体験をすること、たくさんの体験を持って、それから知識だ。レイチェルは言ってるわけです。[・・・]

たとえばたんぽぽ。私は平山和子の“たんぽぽ”をご紹介しますとおもいますが、たんぽぽがこんな高いところに生えています。どうやって生えたのでしょうか。これは科学の視点です。一冊の中に一直線にそのことが出てくるわけです。あっちいってこっちいってこう、じゃないんです。で、冬の間もちゃんと生きています。根っこを見てみましょう。根は太くて長ーい長ーい根です。ですから、この根は、次のページにまでつながります。だから、私はたんぽぽの絵本を2冊そろえる必要がある。これが初版本です、30年前の。これ、大切に、持ち歩か

ないんですが、今日は特別持ってまいりました。かなりこれ、使いました。このように、だーっとつながるんです。みなさんご存知ですか、ここでピターっとくつつくんです。このたんぽぽの根の長さ、だから、根を掘らない限り、いくらむしっても、またたんぽぽの花は咲くんです。私の環境教育の最初の感動はたんぽぽなんです。たんぽぽ、なかなかやるわい、と思って感動したんです。

その「なかなかやるわい」がまだあるんです。これにもびっくりしました。まだあるんです。さあ、皆さん、雨の日、たんぽぽの花、開いてますか、閉じてますか？私も、知らなかったんです、30何歳まで。そしたら、雨の日、たんぽぽを必ず見るようになりました。車に乗ってても見ます。すると、本当に閉じてます。それから、曇りの日も見るようになりました。そしたら、曇りの日はやっぱり、たんぽぽ悩んでるから中間です。

総包、下を向いています。これは西洋たんぽぽです。日本たんぽぽは上を向いています。比較してみてください。めしべ、おしべ、綿毛、実、これを覚えないと偏差値がだめなんです。でも、これを知らなくっても、私、親になりました。[むしろ]こっちを、知ったほうが親になるような気がする。花が終わって、実が育っていきます。実が熟す間、茎は低く倒れ、総包はしっかりと実を守っています。ここまでなんです、書いてあるのは。私は一つの株の中で、茎が下を向いているのと、上を向いているのを、気がついていました。なぜ下を向くのか、私の想像。これ、風をよけてるんじゃないでしょうか。上を向くのはなぜでしょう。これは私もわからないんですけど、想像だけなんです。実が熟すと茎は起き上がって、高く伸びます。なぜでしょう。風を受けやすいためです。綿毛となって飛んでお行き、って。これ、親心じゃないですか？私ここで、たんぽぽすごい！と思いました。その[ころは]、なかなかやるわい、で止

まっていたんです。ここ数年、環境問題やったときに、次にいのちを譲るんだよ、持続可能な社会をつくっていくには、生き物たちはいっぱい知恵を働かしてるんです。その視点で本を読んでいたら、そのことがみんな見えてきました。次にいのちを。自分だけで終わってないんです。ここなんです。だから、飛んでいった場所に、ちょっとでも地面があれば、咲くんです。このところに、咲くわけです、高いところに。綿毛がここにとまったから、ということがわかります。

じゃあ、“すみれとあり”私、ぽーんとこれ、読んだんです。これがかがくのともで出たんです。すると“すみれとあり”が何とたんぽぽと似ていることか。すみれも高いところの石垣の上に咲いてるから、これは何でかな、これは種が飛んだんだ、自然に、と思っておりました。すみれ。ねえ、こんなところにもすみれの花がさいていますねえ、って。すみれはここにたくさん蜂が集まってくるのは、蜜をつけるためだね。ここにちゅーっと入れているのは蜜が中にあるんだね、すみれと蜂は仲良しなんだね。

そうして、ここを見たんです。もう、花が終わって、今度は、すみれは実をつけます。下を向いていた実は横向きになり、次に上を向きます。横向きになり、次に上、たんぽぽと同じじゃない！それで、上を向いたらどうしたか、3列に並んだ種があります。実は、晴れた日には、種はピチッピチッピチッと音が生じて、飛んでいきます。ピチッと音がするんです。で、会場のある方から、父はいつもすみれの種の飛ぶ音を孫に聞かせたいと言って、ビニールの袋に入れて、孫を待っていました。すると、本当に音がするそうです。私はまだ出会ってないんです。こうやって試してみよう、っていうのがおもしろいですね。テレビの「ためしてガッテン」じゃないんですけども。

次から次に音がして種が飛んでいきます。さあ、種が飛ぶと、そこにありが来るんです。ありは、その種の白い部分だけは食べるんです。ずーっと食べようと思って、ありの穴に持っていくんです。みんなで運ぶんです。高いところまで運ぶんです。で、種は落としちゃうんです。白いところだけ食べるんです。だから高いところにも種があるので、花が咲くんです。

春になると、もうまた、芽が出てきます。小さいけれど、これもすみれです。高い石垣の間からも芽が出てきます。すみれとありは友達なんだ。関わり合いながら生きていく。だから、一人だけでは生きられないっていうことを、ここで知りたい。私が生きるっていうことは、どれだけ多くの方々のおかげで生きることができるのか、そのことがやっぱり一番の環境の原点です。必ず種を残すために、みんな知恵を働かしているんだよ、っていうことで、種を残す。

この“えぞまつ”を見て、また感動します。えぞまつは松かさとなって飛んでいく。その松かさの種、北海道の森では、まっすぐに並んでいるえぞまつを見る。でも、北海道は寒さ零下20度、その寒い寒い冬、そこに種が落ちたとして、やっと芽が出て、霜柱ですずたすずたになるんです。芽は出せないだろう。なのに、えぞまつが確かに生きている。どうしてだろう。これ、科学の視点。

どうしてだろう？ 100年200年たったえぞまつは枯れて倒れている。倒れたえぞまつの上に苔が生える。そこに種が落ちる。すると、霜柱に悩まされることもないだろう、地面から高いから。そうして、そこで芽を出します。芽を出したえぞまつが成長する。ゆっくり時間をかけて、あの、老木となったえぞまつの上で成長するのだ。根元にあった、あの太い木は、年取ったあの木は、ほろほろになって、ついに姿を消してしまう。新しいえぞまつに自分のいのち

を譲っていくんです。自分が産んだ子どもじゃなくて、自分が何かをしなきゃだめだということじゃなくて、関わり合いながら、生きるということをしていく。これを倒木更新と言っています。倒れた木が新たなものを生み出していく。倒木更新です。100年200年立ち続けていた、あの木たちも、やはり同じように、年取ったものから、次のものへ、いのちは受け継がれていくのだ。この世のはるかに。この受け継がれる森林の姿を、断ち切ってしまったのは誰ですか？ 人間です。[……]

山崎翠氏著作の紹介

『子育てに絵本を』エイデル研究所(1986年)

『続・子育てに絵本を 「いのち・ことば・へいわ」』エイデル研究所(1990年)

『おかあさん デザートに本読んで～三たび 子育てに絵本を～』エイデル研究所(1996年)

[注]

2005年3月9日に開催された公開講座・山崎翠氏の講演は、「今、子どもたちに」「読み聞かせが育む力」「いのちにふるえる感性を」「いのち・環境・平和」の4つの柱で構成され、記録にあるとおり、ほぼ3つ目の柱まで行われた。臨場感を生かしつつ、語調については多少削除、修正を加えていることをお断りしておく。[……]は省略部分。

(編集責任 左口眞朗)

Ⅲ

訪問調査

JCC幼児教育研究交流上海訪問記

木村和子

上海の印象は一口に言い表せないが、黄浦江のあたりの古い街並み、ゴシック式バロック式ローマ式等の数10種のアンティークでがっしりした建物が並ぶ。思わずなかにし礼の「赤い月」の一部を連想した。敗戦の満州から、礼が母たちと上海に逃れて住んでいた銀行は、あんな所かなと思うような建物が建ち並んでいた。その反対に近代的なビルが乱立する街並み、国際的コンベンションにでた奇抜なデザインのビルが伸び伸びと広々とした空間に数々建っている。広大な敷地に建ち並ぶマンションの規模も日本と違う。5車線ぐらいの幅に車がスピードをあげて走っていく。しかし、車はほとんど一般人のものではなく公用車を中心だということだ。上海市は月に発行するプレートの数を限定しオークションにかける方式で台数制限をしているとのことだが、それにしてもすごい車の量であった。その隙間をぬってリヤカーが横断したり走っていく。リヤカーに乗せてもらっている人もいる。猛スピードの経済発展と路地裏での生活者がいるという現在の中国を象徴しているような光景である。中国料理の献立の豊富さ。何度も歓迎宴が催されたが、2度と同じ献立にはお目にかからなかったことから、メニューの豊富さが伺われる。なんでも食する私もまたま皿にのせられおしゃれをしてでてきた烏の水かきのようなものには少し疑いをかけ、「これなんですか?」ときくと「かものみずかき」といわれたのには、

さすがの私も身震いがし一口食べてやめた。でも野菜がうまく使われていることと味の良さ中国人の旺盛な食欲には圧倒された。絶えず友好的な雰囲気。なんにでも「謝謝」と感動する謙虚さと貪欲に学ぼうとする女性たちの生き生きとした仕事振り。このエネルギーが中国の建国を支えているのであろう。

私は3月16日から22日までの日程で、上海市立威海路幼稚園、中国福利会託児所、上海市立東方幼稚園、宋慶齡幼稚園、中国福利会幼稚園、中国福利会国際和平婦幼保健院、他に、宋慶齡故居、宋慶齡陵園参拝等を訪問した。(私は16日が卒業式のため17日から参加した。)

今度の企画は、明星大学で「保育者の専門性とキャリア形成に関する研究」の一環として行われたものに便乗させてもらったのである。「見学」と「中日における保育者養成の現状」「保育者のキャリア形成について」の交流があった。合計9名の参加者であった。

JCCとは、「私たちは、歴史的にわが国と深い絆を持つ隣国-中国の農山村貧困区の母子保健・少年児童育成に協力することを通して、日本と中国の相互理解と交流を促進し、日中友好、アジアの平和ひいては人類の幸福に寄与することを目的とし、特定非営利活動法人宋慶齡基金会日中共同プロジェクト委員会を設立します」(設立趣旨書より)という

ものである。私自身、満州(現)生まれの引揚者として中国にはお世話になったので、お返しのつもりで会員になったわけである。

今回のJCC幼児教育研究交流訪中団の目的は、(1)上海市が実験基地としているモデル園を訪問し、中国で行われている先進的な保育・幼児教育の現状について学ぶ。(2)幼児期における「寄宿制」の意義について検討する。(3)中国の保育者養成の現状及びキャリア形成の状況を調査し、共同研究の可能性について検討する。(4)中国福利会国際和平婦幼保健院の見学、「妊娠から出産、育児」へのサポート体制について学ぶというものであった。見学させてもらったすべての園について報告することは出来ないので、1, 2カ所の園の様子の報告を中心に行う。

宋慶齡幼稚園

広大な応接室の正面には宋慶齡のふくやかな顔の肖像画が掲げてあった。封莉蓉園長さんの話を紹介する。

この幼稚園は1988年創立、1991年から子どもの受け入れを開始した。民族文化の継承と国際化を求めた。日本の建築専門家や宋慶齡基金会からの援助も受け、中国の子どもの絵をバザーで売って協力してもらい、また宋慶齡の甥からも玩具などの寄付を受けた。

現在、世界32カ国の子どもが在園し、日本の子どもも20数人いる。中国の人から中国の子どもでも入れないのになぜ日本の子どもがいるのかと詰め寄られることもあるが、ここは順番に入所し特別扱いはいはしないと説明している。

20クラス	2～6歳	428人(50%中国人、50%国際人で32カ国、日本人21人)
教師		108人(55%教師そのうち28%は外国人。45%保育員)

子どもたちは習慣も異なるが、とてもよい育ち合いがある。例として日本の子どもたちは、チームワークもあり気を使い優秀である。例えば、けんかになって涙を流している子に友だちがハンカチで拭いてやるなど同じ国という団結力がある。また、卒業式で母親が着物を着てきて日本の歌を歌った。子どもたちも立って一緒に歌っていた。また、多文化の環境で保育できることは教師にとって勉強になりよいことである。西洋的なもの、レジジョの教育思想などさまざまな体系で行っている。宋慶齡の思想に基づき健康づくり、科学的思考力の形成、全人格の形成を重んじている。教育の方法は1つではなく世界中の先進的教育思想の研究を行っている。一番大切なことは、子どもたちが選択できる環境を作ることである。国際色豊かな園なので、誕生会も工夫し国によって祝い方の違いがあることを体験させたり、秋には「食祭り」をし、各国の料理を作って親子で食べる会を催している。教師は優秀な門校出身者で、大学で5～7年勉強している。専門を学び、宋慶齡にあこがれてここに入る。教えるとともに研究者として働く姿勢を持っている。保育員は上海市(政府)で養成されている。高校を卒業し専門学校で3年勉強する。初級、中級、上級のランクがあり、ここはみな上級の保育員の資格者である。1クラスは25人程度帰宅制は13～14時間保育、寄宿制もあった。保育時間は朝6時30分から夜は8時30分までであり完全2交代制である。教師と保育員がペアを組み3歳児クラスはもう一人保育員がいた。寄宿制には一人の保育員が仮眠しないで見ているように配置されている。以上の概要の説明後、園内の見学をした。

正面玄関両側に立つガードマン(立派な守衛室!)、玄関には大使館と間違えるくらい立派な国旗掲揚台に32カ国の国旗が整然と立てられている。日本では大きな公園規模に相当する芝生広場が園

内4ヵ所もある。国際色豊かな子どもたちが芝生の庭で気持ちよく遊んでいた。木製でカラフルなままごと小屋に出入りしていた2歳児。私が「イナイナイバー」のあそびを始めると、子どもたちもあそびがわかったのか笑顔であそび始め、しばらく楽しんだ。やはり、あそびは万国共通の楽しみがある。フレスビー投げ(布製、手づくり)集団遊びを保育者とともにしていた。国際クラスの1歳児に最初に教えることは「アイ ラブ ユー」という言葉であった。



ままごと小屋に出入りしたり隠れたりしてあそんでいた。私と窓の開閉をして「いないいないばー」あそびをした。

保育室の床や壁、トイレの便器の数や木製の便座、コーナーの設置や手づくりおもちゃなど、子どもに配慮した環境づくりに学ぶことが多くあった。様々な活動は、子ども自身が選択できるシステムで、実際、図書室で絵本を読む、パソコン室でパソコンをする、粘土、水墨画に取り組んでいる姿を見せてもらった。特に水墨画はのびのび描いていて伝統文化の継承の姿勢に打たれた。所々に貼ってあった子どもの絵は実に創造性豊かで丁寧であり、専門家の指導を受けているだけでない、子どもたちの生活のゆたかさが感じられた。子どもたちの表情が豊かで明るく礼儀正しいことがつよい印象として残っている。ある年長組のクラスに入ると、子どもたちがすぐに私たちの手を引いて椅子に座らせてくれ中国の歌を表情豊かに身振りをつけきれいな声で歌ってくれた。図書

室で絵本を見ていた子どもも、私たちをそばに座らせ絵本を一緒に見せてくれ指をさして説明をするという親切な姿があった。又、字が読めない子どもにはイヤホーンをつけると絵本を音声で伝えるというガイドサービスの設備も整っていた。

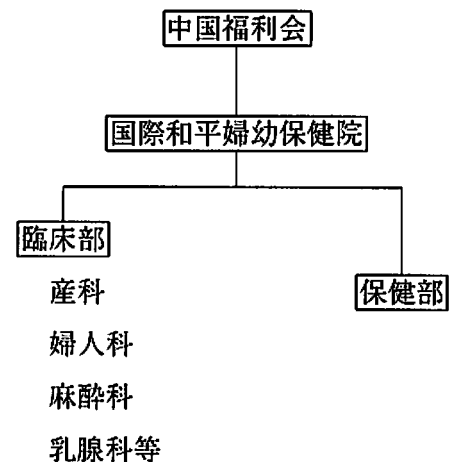
中国福利会国際和平婦幼保健院訪問

まわりの雑然とした風景とは打って変わって新装したばかりの明るく広々とし清潔そうな保健院であった。婦幼の健康を願って建立されたことがわかる。保健院の重要なスタッフはほとんど女性であり、彼女たちの自信にあふれた落ち着いた仕事振りと情熱には大いに感激した。(他の幼稚園、託児所の園長や保育士、宋慶齡基金会の重要なスタッフもほとんど女性であった)「女性の解放なくして人類の解放はない」という言葉どおりである。宋慶齡の精神、思想をよく受け継ぎ全中国の婦幼の健康増進に対する意気込み、特に乳児死亡率5%以下に抑えたことは素晴らしい事だ。

病院の状況について

日本の無償援助と宋慶齡の国際和平奨金によって1952年に作られた。

・病院の構成図



・ベット数

産科床	166
-----	-----

普通	116
VIP(高額・貴賓)	30
高危新生(ICU)	20

産房 12間

・分娩費については保険の範囲である

接受

1990年5月 日本援助
 婦幼保健向上のために
 1991年1月 JIAC JIACS 伊藤忠の調査
 1992年8月 全設備完成
 救急車一台新規 新生児室、
 放射線、生化学設備完成

●その結果乳児死亡率低下

早産、新生児の生活状況が上がった。妊婦死亡率は0である。いろいろな器械の導入や早期治療により98%は助かる。ハイレベル、ハイテクの病院となった。さらに発展することは可能である。

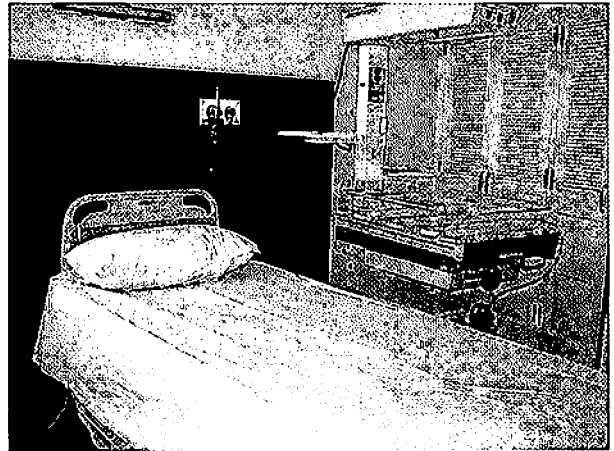
●未熟児治療の状況について

28週1000g以上は助けるようにしている。780gまでは助けることができる。早産、未熟児に対する親の要望については、いい薬を使うと助かるが7000元かかる。薬を使っても元気な子どもが生まれないと困るので他の機会に生むことを望む人もいる。また、出稼ぎの増加により豊かでない、知識もない人もいるので流産もある。貧しい人にも無償支援をし、助けることの努力をしている。SIDS対策については、かつては死亡した例もあったが、最近ではない。出産後教室を開き、正しい育て方を指導している。2ヵ月ごとに、1歳半まで講習会を開く。費用は600元である。希望者は20%ぐらいである。

●入浴について

右写真のように、首の周りに浮き袋をつけて浴槽で浮かんでいた。どの乳児も泣かないで、徐々に赤い顔になり浮いていた。水温は40℃、一回

の時間は10～20分であった。8回で50元、週に1回～2回やるといいということである。水槽の中で自然に体を動かすので運動になる、浴槽の水分が肌に刺激を与えるということだ。羊水の成分(栄養剤)も混入されている。今の所は1歳までであるが、4歳ぐらいまでできるようにしたいということだ。



- ・VIPの入院室。バスタイレ付き。
- ・この部屋で分娩できる。
- ・双子を生んだ妊婦の部屋を見せてもらった。
- ・丸々とした元気のいい赤ちゃんであった。VIPの待合室は広々としていて明るく花も飾られ応接間のようなようであった。



- ・浮き輪をつけて浮いている。
- ・浴槽の値段は700元。
- ・看護婦が一人ついている。

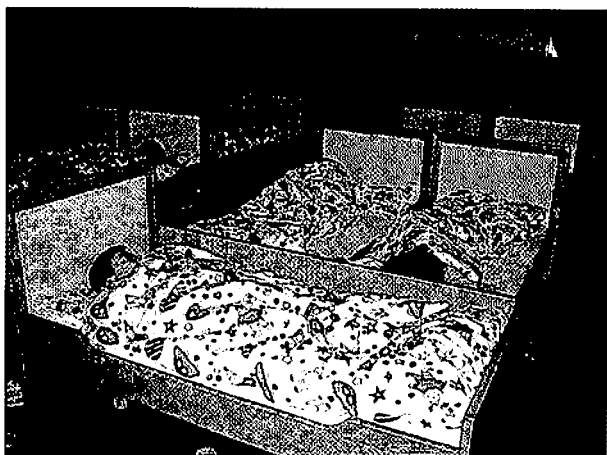
中国福利会幼稚園

通園児・・・200名、寄宿生・・・300名、職員130人
 (教師50、保育員40他40)

この園では、食事、体力づくり、24時間保育について主として見学させてもらった。

食事の前に保育員が机を消毒液で拭いていた。しばらく自然乾燥をしてから子どもたちが入室して食事を始めた。今日の献立は、「餃子(赤、緑、白で、赤はかぼちゃ、緑はほうれん草が皮にすり込んであった)フルーツはりんご、デザートはごま団子」かなり大きな餃子でお代わりは自由だった。

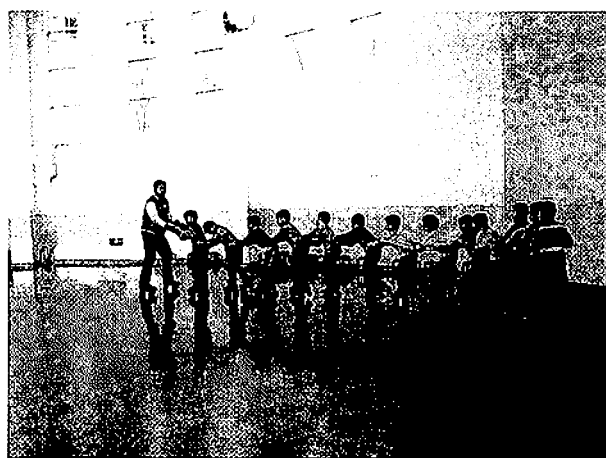
栄養士が一週間分の献立を立てる。1)主食と麺類の組み合わせ 2)野菜と肉の組み合わせ3)水分の入るものと入らないもの 4)糖分、塩分の組み合わせ 5)植物、動物たんぱく質の組み合わせ 6)雑穀、米との組み合わせ などの工夫をしているとのこと。天心の専門家もいるとのことだ。



24時間室

30分くらい前は、全員、別室で絵本を見ていた。ちょうど、眠るためにベッドに入ったところである。部屋に入ると静かに自分のベッドに入る。私たち見学者がいたので、時々、目をあけてのぞいている子

どもも見られた。衣服は保育員によってきれいに洗濯をして一人ひとりのロッカーに整理されている。一人の保育員は、一晩中立ってみているとのことだ。夜中はおまるで用を足すとのことである。家庭連絡は、保護者との連携を大切にしているとのことだ。一人ひとりのファイルがあり、写真、保護者の言葉、成長の様子が記入されている。また、インターネットのホームページで園、クラス、実際にコンピューター室で見せてもらったが一人ひとりの子どもの様子が毎日紹介されている。



食育と並んで身体づくりを大切にしていた。水泳(立派な温水プールがある)と6歳児はローラースケートは、どの園でも取り入れ専門の教師が指導している。子どもたちは自信満々で滑っていた。

全体の感想と今後の課題

- ・見学した所はすべて立派な建物で清潔で明るく、雰囲気も落ち着いていた。主として富裕層の幼児を対象とする実験的な取り組みであるが、施設・設備・人員などの環境が教育の充実に欠かせないものであることが伺われた。例えば福利会幼稚園の敷地は1万坪である。遊具なども工夫がされている。未来の子どもたちを育てる環境について先進諸国に学んで作られ、さらに研究途上であることはすばらしいことであった。
- ・24時間保育も万全の体制で行われていた。な

かなか見せてもらえない夜の保育を見せていただけたことは幸いであったが、子どもたちにはつらい思いをさせたかと少し胸が痛かった。夜のあの時間に、子どもたちがきちんと椅子に座り全員が絵本をみるという夜の活動に取り組んでいたことは驚きであった。(これは主観的情緒的見方であるが、家庭でなくつろいでいる時間であろうと思ったからである。)最近の上海では、比較的寄宿生が少ないとのことであった。親子が一緒にいる時間の大切さの理解ができるようになったことと共に、保育時間が長く夕食も食べさせてもらえるので仕事を終えてから迎えにくることができるようになったということである。

- ・ 今、日本で問題になっているセキュリティについては、どの園も立派な守衛室が完備し複数の守衛さんがいて、安全が保障されている事は学ぶべきである。24時間の保育があることも考慮されていると思うが。
- ・ 教師の研修制度についての意気込みもすばらしい。今回見学させていただいた園はいずれも研究と学習、実践を通じ保育のレベルアップに真剣にとりくんでいた。日本では2年課程の保育者養成が主流であるが、上海では就学前教育専門の教師養成を大学教育のなかに位置づけている。今回見学したようなクラスの幼稚園では、5～7年の養成期間を経て教師になった人が多いということだ。さらにキャリア形成のための様々な研修制度が行われている。日本の制度と比較することが出来ないものがあるが、もう少し体制などについても聞いてみたい。日本の現状では、再教育の機会を与えられる人はほんの一部に限られているからである。中国での子どもに対する熱意を十分感じとることができた。
- ・ 研究交流の様子については触れることができなかったが、もう少し私のなかで整理できた段階で

述べたいと思う。雑感になってしまったことをお詫びしたい。

資 料

2004年度保育子育て研究所事業報告

2003年度を事業開始年度として具体的な事業活動をスタートさせた保育子育て研究所は、2004年度2年目を終えた。その設置と事業のねらいは、保育総合キャンパスを創出するという大きな展望のもと、保育科、保育学部とともに理想としては三位一体的な保育研究・教育の総合的機能を果たすことを志向している。

2年目は、初年度に続き、子育て交流会の開催、夏季保育研究セミナーの開催、公開講座の開催、年報の発行、その他地域との連携事業の推進などを主たる事業活動として取り組まれた。

以下、各事業企画について、①取り組み、②問題点ややり残したこと、③今後の課題を示す。

一 子育て交流会

- ①子育て交流会の毎月毎週開催、保育経験者の運営担当者としての採用、専攻科学生や学部学生運営委員(会)による学生参加の追求など、組織的な充実が図られた。
- ②一方で、附属幼稚園への事業移管も考えられるが、年度末の時点では学園としてそうした方向性を支援する動きや可能性は見えてきていない。附属幼稚園自体にもそのような動きは出ていないが、今後の協力関係の発展のなかで探っていくことが望まれる。
- ③子育て交流会を含め、本キャンパスが保育に関する研究と教育の統合的機能を発揮するためには保育総合研究センターのような施設の充実が求められるであろう。

二 夏季保育研究セミナー

- ①過去5年の保育科卒業生を対象に参加を呼びかけ、360名ほどの参加申し込みを得た。午前のプログラムは、記念講演方式ではなく、3教授による特別授業とし、午後は、分科会と実践屋台村を加えて魅力をアップした。
- ②この研究セミナーを卒業生に限定することなく、広く保育現場の新人ないし若手保育者の支援プログラムにしていくことが指向されているが、卒業生を大切にアフターケアしていく取り組みも名古屋キャンパスとしても欠かせない。同窓会レベルとは異なる質と量でどうこれらのねらいを融合または分離していくのか、課題である。
- ③保育研究セミナーの開催という課題では、将来的には、国際的な組織化も展望しなければならないだろう。先進国サミットと途上国サミットがあるように、多様な国際的な取り組みを進めるなかで、国内的な信頼性と優位性を築けるようにするという遠大な課題になるだろう。

三 公開講座の企画・開催

- ①昨年度の連続子育て講座の継承も検討されたが、夏の中高生保育講座やキャンパスとしての秋の公開講

座などもあり、連続講座の開催には困難もあるとして、1回限りの公開講座を企画し実施した。133名参加。なお、本年報公開講座の記録を参照のこと。

- ②対象層(ターゲットグループ)の設定は妥当と考えられるが、広報・周知活動に積極性を欠いているという面もあった。また託児体制も、1回限りのため大きな負担にはならなかったが、連続講座では再びこうした体制を追求することが不可欠である。今回の絵本の読み聞かせをテーマとするものは、幅広い関心を呼ぶものと考えられるため、内容的には連続講座であったほうがよかったとも言える。また、学生を対象をしぼっての全学講座として集中講座をもつことも今後考えられてよいだろう。(本来、公開講座は本来の構内事業によい影響を及ぼすことが期待されるものである。)
- ③2005年度から、高校生中学生向け保育講座を恒常的な事業に位置づける計画であるため、この公開講座の扱いはさらに柔軟な企画と運営が求められるであろう。

四 年報の発行

年報第2号の編集、発行は本年報をもって果たされた。当該年度の意義ある事業をできるだけ感じ取れる報告にしていけることがモチーフとして生かされた。また、今後、卒業生の実践記録や報告を積極的に掲載していくことも考えられている。そのため、2005年度夏季保育研究セミナーまでに投稿規程を整備していくこととした。

五 地域との連携事業

保育科の森本ゼミ、宍戸ゼミ、大村ゼミなどを中心に豊明地域の子育てマップづくりに取り組んできた。その取り組みについては、本年報森本報告を参照のこと。その成果は別に報告書にまとめられたが、次年度以降も継続的に実施していく予定である。

その他、本学の保育研究者を中心に地域貢献活動の全容をできるだけ研究所として把握していきたいと考える。

六 研究所の財政および組織体制

予算は、2003年度の172万から2004年度には195万と漸増された。引き続き、費目の指定枠により執行のしにくさは解消していないが、ほぼ全項目にわたり執行されてきている。子育て交流会運営に保育士経験者を採用して単価を引き上げることができたことは一定の改善であったが、契約関係は学園の指定にのっとることが要請され、それが必ずしも研究所の裁量を制約するものではなかったはずであるが、予算の範囲内で積極的に活用するというスタンスが十分できていなかった。結果的には、事務アルバイトをさらに積極的に活用してよかったものと反省される。

I期2年目は所長はじめ副所長、主任研究員は変更なく、研究員として保育科から1名補充した。保育子

育て研究所は、保育科と保育学部を事実上母体に運営していくため、事業計画は合同会議を開催して承認を得た。今後の研究所機能の発展のために、さらに合同会議などの開催を通じて全学的な資源や力の組織化を図っていく必要があるとともに、研究所会議も実りある課題検討の場となるよう引き続き追求していくことが求められる。

所長が独立職ではないことや直属の職員体制が十分整備されていないことなど、研究所事業の拡充が困難なことは依然として変わっていない。今後とも兼務状況が続くと予想されるため、当面は、事務アルバイト、子育て交流会運営担当アルバイトのさらなる積極的な活用を図るとともに、専門職員の配置について構想し課題化していくことが必要になりつつある。

2004年度保育子育て研究所会計報告その他

2004年度保育子育て研究所予算は、総額195万499円が法人により承認され、執行されてきた。以下、簡潔にそれぞれの用途を明示しておく。

現在の研究所体制は、人件費関係は事務アルバイト費以外は設けられていない。2004年度の子育て交流会の発展的な広がりなどに見られるように、研究所が直接企画実施するプログラムをよりよく進めていくため、また、研究所の渉外活動を充実させていくためにも、専門的職員の配置が事務アルバイトと並んで必要になっていくものと考えられる。研究所所長職、主任研究員はこれまでどおり、保育科と保育学部専任教員を母体に出されていくことになるだろうが、事業専任職員が確保されることは、別に研究所事業の充実、発展のために不可欠な要請となるだろうと、研究所として考えている。繰り返しになるが、保育子育て研究所の存在意義を広げるためには、こうした人的充実策が図られることが求められるだろう。

研究所事務アルバイト	60時間×700円	42,000
子育て交流会運営アルバイト	33日分(単価800円、込交通費)	132,000
夏季保育研究セミナー 卒業生への案内状	80円×1239人	99,120
分科会等世話人(非常勤)手当て	3,333円×4人	133,332
世話人昼食代		32,916
公開講座 講師手当て		333,333
講座案内チラシ印刷代		38,850
託児アルバイト代	有資格者3名、学生12名	43,200
年報 第2号印刷製本費	800部	495,600
消耗品費(全体)	用紙代、写真代、カートリッジ	21,117
総計		1371,468

予算執行率は、70.3%であった。これは、昨年度同様、公開講座関係のテキスト代や講師派遣予算のよくな当初計上されていたものの、実際には執行の対象にならないまま残されていたことや、夏季セミナーで記念講演でなく内部講師の特別授業が行われたりしたことが大きい。

2005年度はすでに執行状態にあり、2006年度に向けてさらに項目整理と充実を図っていく必要があるだろう。

2004年度役員体制 I期2年目(所長、主任研究員は2年任期、研究員は1年任期)

所長	左口眞朗(桜花学園大学保育学部教授)
副所長	田中義和(桜花学園大学保育学部教授)
主任研究員	神田英雄(桜花学園大学保育学部教授)
主任研究員	宍戸洋子(名古屋短期大学保育科教授)
研究員	森本美絵(名古屋短期大学保育科助教授)

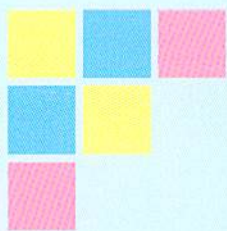
保育子育て研究所年報 第2号 執筆者：五十音順

木村和子 名古屋短期大学保育科教授
清 葉子 保育子育て研究所子育て交流会運営担当(元附属幼稚園教諭)
左口眞朗 桜花学園大学保育学部教授 保育子育て研究所長
穴戸洋子 名古屋短期大学保育科教授 保育子育て研究所主任研究員
森本美絵 名古屋短期大学保育科助教授 保育子育て研究所研究員

なお、山崎翠氏の講演記録のテープ起し、各種アンケート集計については、研究所事務アルバイトの難波佐保氏の多大な協力をいただいたことを謝して記す。

保育子育て研究所年報 第2号(2004年度)

発行者	名古屋キャンパス保育子育て研究所
発行年月日	2005年8月10日
住 所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48 名古屋短期大学内
電 話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
印 刷	(株)シイエム・シイ



桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所

